
そう遠くない未来。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そう遠くない未来。

【Nコード】

N3382T

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

(葵×聡太)

私の弟の友達は、この間から私の彼になった。けど実は、まだちょっとくすぐりたい。でもそれが、何だか嬉しい。

(美晴×芳彰 - R15)

まずは普通に『おめでとう』って言うてから、やるうと思っただけど……こうなったら前倒してやる。

「ちょっと遅くなったんだけどさ・・・葵、おめでとう、これ私からのプレゼント。」

(朋花×航)

「私、今日から聡太と付き合う事になりました。」

外が暗くなってきた頃に帰ってきたねーちゃんは、そう唐突に宣言した。

俺は『やっとかよ』そう思うと同時に、『とうとうこの日が来た』と・・・そう思った。

『I l d o n c v i e . . . 』シリーズの続編。

三組三様の数日間を描いたお話です。

新しい関係（前書き）

やっとなです。

3つのお話を、章で分けて流します。

まずは、「葵×聡太」（8話）

次に「美晴×芳彰」（10話）

最後は「朋花×航」（たぶん7か、8話・・・まだ修正中です。）
の順番です。

R15となっておりますが、「美晴×芳彰」の話だけです。

では、いつもの10時更新でいきますので、よろしくお願いします。

新しい関係

チャイムの音を合図に玄関に向かい、外に出て、いつもの挨拶を交わす。

「おはよう、聡太。」

「おはよう、葵姉。」

「……でも私達は以前とは違う。」

私の弟の友達は、この間から私の彼になった。

けど実は、まだちよつとくすぐつたい。

でもそれが、何だか嬉しい。

「一緒に行かない?」

どうせ同じ場所……同じ学校に向かうのに、今まで通りここで別れてしまうのは、やっぱり寂しいし妙な気がして、そう誘ってみたけれど……聡太の反応は芳しくなかった。

「あー、うん……そうしたいのは山々だけどさ、いきなり航一人置いていくのも何だし、美晴さんも……ねえ? ちゃんとお互いに、そういう話をしてからにしようよ?」

つて、そうやんわりと断られてしまった。

でも聡太の言い分はもつともで、私の我が侷かなくて納得した。

「そうね、じゃあ私、美晴に話してみる。」

「うん、僕も航に話してみるから。」

それから少し手を繋いで……名残惜しくも指を離した。

「じゃあ、お先にね。」

「うん、気をつけてね。」

手を振って、後ろ髪を引かれる思いで背を向けた。

でもやっぱり離れ難くて、角を曲がるまでに2度後ろを振り返って
みた。
すると、優しそうな眼差しの聡太がちゃんと手を振ってくれて、す
ごく嬉しかった。

という訳で、いつもの朝と同じように、一人で待ち合わせ場所に行
くと、美晴が何かを企んでいる顔をして待っていた。

何これ？ さっきまで私すごく幸せな気分だったんだけど、まさか、
これから嫌な気分になれるの？

「今度から、聡太と一緒に行くと思うんだけど、いいかな？」
・って話を出す前に、必要以上の笑顔を見せる美晴が、私より先に
口を開いた。

「ちよつと遅くなったんだけどさ・・・葵、おめでとう、これ私か
らのプレゼント。」

そう言って差し出された封筒を、私はつい何気なく受け取ってしま
った。

「何？」

おめでどう？ 誕生日はまだ先だし、祝ってもらおうような事なんか
無い。

鮮やかなグリーンの地に、レースの細かな細工が施された、とても
凝った作りの封筒で、裏の宛名を書く面には薄っすらと花の模様が
ある。

いかにも女の子らしいものだが・・・相手は美晴だ。そんな可愛ら
しい物が入っている訳が無かった。

恐る恐る開けてみると、中には何枚かの写真。

・・・ほらきた。

今までの所業が脳裏を掠める。

過去、私の彼の写真は多くの生徒に対して販売されていた。

そう、美晴の手によって。

これには彼の妹も荷担しており、彼には批判しにくい状況で繰り返

されていたと聞いた。そして、どの写真もいつ撮ったのか分からないものばかりで全く油断ならない。と、こぼしていた。おまけに、私の写真も商品にされていたらしく、後で売上の一部を渡された事もある。

『肖像権使用料。』と笑って。

だから無性に嫌な予感がした。

写真を取り出す前に美晴を見やると、飄々として私を急かす。

「ほらどうぞ、記念写真だよ？」

「何の記念よ？」

「一応いくらか覚悟をして写真を取り出したもの……その写真を目にした私は固まってしまった。」

「見たの!？」

「うん。」

「どこからどこまで？」

「最初から……あ、こ、この写真の辺りまでは……。」

どうしたの美晴？ 目を逸らして赤くなって、途中から何か変よ？

え、まさか……照れるくらいなら、こんな事しないでよ。

「えーと、うん、まー、大体？」

何かを誤魔化しているのも気になる。けど、この写真はただ事じゃない。

そう、この写真には、彼と付き合う事になった日の出来事が収められていた。

距離のある二人の姿、私に抱き着かれた彼の手が彷徨っている姿、抱き合う姿、

そして……

「キスマですとは思わなかった。やるね、聡太くん。」

彼の事を褒めてくれるのは、まあ悪い気はしないけど……

ねえ、私はそれに何て答えたらいいの？

新しい関係（後書き）

かなりリンクしてる部分がありますので、最後に「なるほどー」と、思っていただければ・・・いいな。

切り取られた時間（前書き）

「葵×聡太」の2話目です。
ではごっご。

切り取られた時間

学校に向かつて歩きながら、僕は前置きも無く話を切り出した。

「航？ そろそろ置いて行ってもいいか？」

「何だ急に？」

もちろん葵姉の提案した話だ。

「急じゃない。まだわざと遅く出てくるつもりなら、僕は葵姉と行くぞ？」

別に脅しじゃない。

以前から不満はあった。

航はいつも家から出てくるのが遅い。

だがそれは、意図的に行われていた事だと、ひよんな事から最近知った。

航はあえて遅く出る事で、葵姉との時間を作ってくれていたのだと・

。。。

気を使ってくれるその気持ちは嬉しく思う。

だが、そんな気を回すより、早く出て来い！

。。それが本音だ。

「そっか、そうだなー、それも仕方ないかなー？ 今は別にわざと

やってる気はねーんだけどさ、癖？ もう習慣だよな。」

葵姉と別れて、一人でたっぶり10分待たされて・。。その怒りは募っていった。

普段より速いペースで学校まで歩くのが当たり前で、その当たり前前だという事に納得がいかない。

。。僕の発する言葉に、その怒りが込められているのは自覚している。

しかし航は堪えた様子も無く、ヘラヘラと笑い飛ばしてくれた。

「。。わかった。明日から実行に移す。」

「あ、ちよい、待って待って、義兄上!？」

さらに足を速めるが、ふざけた航にあっさり追い着かれる。

「いいんじゃないか？ 別に俺に気を使う必要はねえって、」
くしゃりと笑って肩を叩かれた。

今度の笑顔は屈託が無くって・・・相変わらず表情の忙しいやつだと、怒りの熱は幾分冷めて溜息が漏れた。

「俺は、んな事干渉するほどシスコンじゃねーよ。」

そう言った航は、笑顔の中にも何か強いものを秘めた目をしていて、見ようによっては格好良いのかもしれない。

しかし僕は、朋ちゃんに言われた事をまだ気にしているのか？ と、穿^{うが}った見方しかできず、笑いを堪えるのに必死だった。

「おーい、聡太くん、こっちこっち。」

教室の入り口で美晴さんが手招きをしている。

朝っぱらから会いたくなくて、折角の葵姉の誘いを断ったのに・・・向こうから来られたらどうしようもない。

どうせ碌な事じゃないだろうけど、そのまま無視するわけにもいかない。このまま放っておけば、あの人はきつと教室の中まで入ってくる。

そんな事に頭を廻らしているうちに、航が先に行ってしまう話し始めてしまった。

「美晴どしたんだ？」

「ああ、ちよつと渡すものがあつてさ、これなんだけど。」

そう言いながら出したペーパーミントグリーンくらいの色の封筒を、航が手にするより前に急いで奪い取った。

・・・何が入ってるか知らないけど、これは誰にも見られてはいけないような気がする。

「何だ聡太、必死っぽいな？」

「そりゃ、相手が美晴さんだからね・・・。」

中の感触は封筒より小さな長方形・・・写真だなきつと。

「じゃ、渡したから。あ、そうだ。」

何かまだ言いたい事があるらしい美晴さんに、不意に袖を引っぱられて二歩踏み出すと、耳元で囁かれた。

「やるじゃん、見直したよ。」

何を？

・・・そう思ったのが失敗だった。

「じゃあね。」

と、含み笑いをする美晴さんを訳も分からず見送ると、急に背中を叩かれて、後ろから朋ちゃんの大きな声がした。

「すごい、聡太くんだったの!？」

・・・伏兵か？

いつの間に封筒を奪われたものか、既に写真は取り出されて・・・
つて、ちよ、それ、

「何で!？」

朋ちゃんが手にしている写真には、僕と葵姉が写っており、つい最近の光景で・・・

な、何でこんな写真を?・・・これ、あの日だよな。

その衝撃は凄まじく、この動揺は比類ない。

見てたのか? あの人は見てたつて事だよな???

それで見直した・・・なのか? なるほど・・・じゃなくて、

「ちよ、ちよつと・・・とりあえず返せっ!」

既にすっかり見られてしまった写真を奪い返すと、朋ちゃんは冷やかすように笑ってくれた。まったく本当にいい性格をしている。

「へー、付き合いたしたつてのは聞いたけど、こんな事までしてたんだ。」

「・・・素直に行動しただけだ。」

ニヤニヤする朋ちゃんに対して、僕はもう開き直る他無い。

「いいんじゃない? ね、」

「あ?・・・あ、ああ・・・。」

一方、急に振られた航は、かなり微妙な感じで・・・とても心中複雑

雑な様子だった。

けど、気を使う必要は無いつて、今朝聞いたばかりだし、
・・・僕、断る必要は無いやな？

きつといちいち断りを入れる方が、航にとって酷だろう。

と、そう考えた僕は、これ以上は触れず・・・如何にして朋ちゃん
を黙らせるか？ という課題に尽力した。

憂鬱な課題（前書き）

「葵×聡太」の3話目です。
ではごっご。

憂鬱な課題

「じゃ、今日の放課後も面談があるので、該当者は勝手に帰ったり、遅れたりしないでくれよ。わざとやってくれたやつは・・・報復を覚悟しとけ。」

憂鬱な日が来てしまった。

朝のHRの時に、担任の岡崎先生が口にした内容に、私は気分がブルーになった。

美晴の写真には驚いたけど・・・本当は嫌じゃないし・・・。
見られてたのは恥ずかしい、けど二人一緒の写真ってのは、ちょっと嬉しい。

カメラを意識してない分、自然な姿で・・・
しかも、あの時は恥ずかしくてたまらなくて、まったく見る事のできなかつた聡太が写真の中にいる。

それは、私が見逃した大事な瞬間だ。

だから、今まで結構ウキウキした気分だったのに・・・。

私は未だ、進路なんか何も決まっていなくて、何を書いていいのか本当に困り果てて、

『まだ決まってません』って正直に書いてみた。

それで、どう考えたらいいのかとか、とりあえずそついう事を先生に相談してみればいいのか？

・・・って事にして、そのまま出してしまった。

面談のために、滅多に行く事の無い社会科準備室に行くと、岡崎先生は応接セットのソファに座っていた。

脇にはたくさん紙が入ったファイルが置かれていて、先生はその

中から、見覚えのあるA4の紙を1枚取り出してテーブルに置いた。正面に座ると、それはやっぱり私の進路希望調査書で、相変わらず意味の無い一行の言葉が書かれていた。

目の前に対峙する岡崎先生は足を組んでいて、どこことなく態度が悪い。

「安田・・・前みたいに白紙よりはしましたが、『まだ決まってるってまっせん』ってのは、白紙と何も変わらないぞ？」

と、溜息に続く言葉に、私は出だしから完全に鼻を挫かれてしまった。

「・・・やっぱり駄目だ。私はこの先生が苦手だ。」

3年間ずっと変わらなかった担任の、やる気にかける部分や、だらしのない部分がいちいち鼻に付いてしまう。

正確な年は知らないけど30前後の先生は、眺めていた紙を私の方に寄せ、足を下ろしたものの、今度は背もたれに踏ん返り返って腕を組んだ。

「お前の成績なら・・・とりあえず大学行って、その間に先の事を考えるのが妥当だろうな。」

「・・・とりあえずって、そんなものなんですか？」

先生が口にした『とりあえず』という言葉に、私は軽いショックと抵抗感を感じて眉間に力が入った。

ずっと考えても答えが出ず、悩んで悩んで悩み抜いた結果がこれだというのに・・・。

この先生はフランクで、生徒寄りの意見の持ち主だっって言われて、結構生徒から人気があるけど・・・実際の所は適当だと思う。

今日の個人面談も、そういう面がしっかりと出ている気がして、私は気に入らない。

「そんなものって、今なりたいものとかやりたい事が特に無いなら、そうするしかないだろう？」

「確かに、この先どうしたいかってのは決まってるってまっせんけど・・・。」

「

小さい時から、特にこれというものが無かったんだから仕方ないじゃない。

「専門学校はやりたい事に合わせて選ぶものだし、就職って選択肢はもちろん無いだろう？ 先の事を考える時間が稼げて、且つ、給料は大卒の方が優遇されるってもんだ。とりあえず、得意な教科や好きな分野の勉強ができる大学選ぶんだな。進路指導室に大学の資料あるから、色々目を通して良さそうなのがあったら教えてくれ。こういうのは早めに決めといた方がいいぞ。」

理路整然と見事に並べ立てられた事実、私は返す言葉も無く……。

こうして面談は、あっという間に終わってしまった。

学校の先生なんだから、もっと相談に乗ってくれと思ってた。けど、やっぱりこの先生は違う。

先生は私の事なんかどうでもいいんだなって、益々嫌いになった。

進路指導室には天井までの高い本棚が複数あって、それぞれにたくさんファイルが並んでいる。

ファイルは大体4種類の色分けがされていて、四年制大学が水色、短大がピンク、専門学校がグリーンで、黄色が就職関連となっている。

いくら気に入らなくても、先生の言った事は間違っていない。

でも……だからこそ、そこがまた気に入らない。

とは言えこれは自分の問題で、きちんと自分で考えなければいけない事で……だからこうして先生のアドバイスに従って進路指導室にやって来た。

とりあえず、水色のファイルを一冊引っ張り出して開いてみると、ここから遥かに遠い、他県にある大学のものだった。

さすがにこんなに遠いと家を出て寮か一人暮らし・・・よね。

それだけ考えてファイルを閉じ、元の場所に戻した。

学部も特色も、募集要項も何も見ていない。

・・・遠くには行きたくないな。

自分の将来の事なんかより、聡太と一緒にいたい。

頭の中に浮かんだのは家族ではなく、聡太の顔で。

今、それだけを考えている自分は、弱い人間なのかな？

って・・・私は少し不安を覚えた。

憂鬱な課題（後書き）

この（更新）時間、私は息子と下の娘も連れて、

幼稚園の親子遠足で、植物公園へ向かうバスの中だと思われます（

^^;

天気予報では、暑くなるらしいです。

・・・日に焼けると痛い。

歪みとオアシス(前書き)

「葵×聡太」の4話目です。
ではごじじぞ。

歪みとオアシス

「航・・・あのさ、葵姉の進路聞いてる？」

教室移動の合間に、航にそう声をかけた。

小学校から中学校へは、焦らなくても所詮は義務教育だ。

私立を選ばない限り、進む場所は同じだ。

中学校から高等学校へは、もし離れても可能な限り同じ場所を選ぶ
うと思っていた。

そして、実際には近くを選んでくれて、当然後を追いかけた。

だが次はどうだろう？

大学は遠ければ本当に遠い。学ぶものも学校によって違う。

だから予め聞いておけるものなら聞いておきたい。

そう思い、探りを入れるために手近にいる弟に聞いてみたのだが・・・。

「・・・本人に聞けば？」

航の言葉には棘がある。

結局今朝は、葵姉がまだ美晴さんに話せていないと言うので、いつも通り航と来た。

葵姉も同じ写真を渡されて、そのせいで言いそびれたらしい。

・・・それはそれで仕方ないと思う。あの写真にはそれだけの理由がある。

今朝の登校時は普通だった。

いや、正しくは僕に気を使わせないように、頑張っていたのかも
しれない。

僕と葵姉が付き合う事になったと、週明け早々に告げた時、既に航
は知っていた。

葵姉が、あの日帰ってから宣言したらしい。

だから、いまいち拳動不審ながらも歓迎してくれた。

複雑な心境だろうが、朋ちゃんのフォローもあり・・・いやあれはトドメかな、

「シスコンはみつともないよ？ それとも私よりお姉さんがいい？
うちのバカ兄貴みたいになる？」

つて。その言葉に航は、

「それは嫌だ・・・俺、朋花が良い。」

と、顔を引き攣らせていた。

だけど、美晴さんに渡された写真を目にして、そこからまたおかし
くなった。

朋ちゃんはそんな航を大笑いして、何事か囁いていたが。
どこかギクシヤクした状況は変わっていない。

「お前等仲良いんだろう？ 昼でも帰りでも、ねーちゃん捕まえて
聞いてみればいいじゃねーか。・・・でも、そのまま家に上がり込
んでいちゃつくなよ？」

不自然に距離を取って少し前を歩く航は、そう言いながらどこか暗
い目を向けてくる。

幼稚園からの長い付き合いだが、こんな態度をとられたのは初めて
だ。

気に入らない事があればいつもストレートに言うてくる。

それが航の長所であり、どうしようもない短所だ。

なのに・・・どこか裏切られた気がした。

だから、僕もついムツとしてしまい、売り言葉に買い言葉・・・

「誰がお前の家でいちゃつくか・・・今日は弟殿の言う通り、昼に
でも葵姉を誘うよ。」

そして航を抜いて、早足のまま理科室に向かった。

「まだ全然なのよね……。資料見て考えろって先生にも言われたんだけど、何を見たらいいのかも分からないのよね……。」
葵姉はそう言つて、弱々しい笑みをきれいな顔に貼り付かせた。宣言通り昼休みに葵姉を誘い、屋上の定位置で並んで昼食を食べている。

葵姉は弁当で、僕は購買で買ったパンだ。

「何もつて、理系文系も？」

「それはさすがに文系かな？ 昨日ね、とりあえず出してみたファイルが、かなり遠くの学校でね……。そっか、そういう事もあるんだなつて、改めて思い知らされちゃった。」

「そうだね。僕も……。ずっと前からそんな心配ばつかしてたよ。」
もう何年も前から抱いている不安を、今初めて吐露した。

葵姉も同じ不安を抱えていると知り、少し嬉しかった。

そして、一緒にいたいと思つていてくれる事が、とても嬉しい。

けれど、それが足を引く張る事になるのは、正直辛い。

「……ごめんね。」

「何が？」

少し強い風に舞い上がる髪を押さえ、葵姉は不思議そうな顔をした。

「葵姉には、きちんと自分の道を進んで欲しい。だから、僕の事を考える必要は無いよ。」

かなり無理をして笑った。

「絶対追いつくから。例えどこに行つても葵姉は僕のものだ。距離は関係ない。」

内心で反発する部分を押さえ込んで、そう言つた。
そう思い込みたかつた。

本当は、僕だつて離れたくなんかない。

葵姉の頬は赤くなつて、少し俯うつむき。

「……聡太の気持ちは嬉しいけど、でも、私が嫌。」
否定された!?

「だって、私は離れたくないもの。絶対近くの大学行ってやるんだから!!」

「・・・そう。」

どこをそんなにキツパリ否定されたのかと、かなり動揺した。けど、ホツとした。

そうはつきりと決めたのなら、それも葵姉の道だろう。

・・・この調子ならきつと大丈夫だ。

パンと一緒に買ったストレートの紅茶を一口含み、それでも僅かに残る不安と一緒に飲み飲み下した。

そして、もう一口流し込もうとした所で不意に問われた。

「ねえ、聡太は将来なりたいものってあるの？」

そのまま一口飲み込んで、頭の中から将来に関する事を探ってみた。

「今は僕も、ハッキリした職業のビジョンは無いんだけどさ。」

そう、職業に関するものは無かった。でも、それ以外ならある。

「でも、一つだけなりたいものはあるよ？」

「何？」

「・・・笑わないでよ？」

「笑うようなものなの？」

「そんな事ないけど・・・僕は・・・ね、葵姉の夫になりたい。」

そう言った瞬間、葵姉の目は点になり、黙り込んだ。

そして、その沈黙をクスクスと笑う声で崩した。

「・・・だから笑わないでって言ったのに、でも小学生の頃からそ

う思ってた事だからさ。」

小学生だからこそ、単純に、素直にそう考えてたのだろう。

「違うの。私はいくら考えても、なりたいものが見つからないのに、聡太はなりたいものあるって自信満々に言うから、少し悔しかったのよ、なのに・・・いきなりプロポーズされちゃったから、ビックリしちゃって・・・。」

・・・あ、そうなる・・・のか。

葵姉は手にしていた弁当箱を包んでいた巾着袋の上に置き、体ごと

僕の方を向いて、それはそれはきれいに微笑んだ。

「私も・・・聡太のお嫁さんになりたい。それは・・・それだけはちゃんと見える。」

自覚の無かったプロポーズの返事は、あまりにも嬉しいOKで、僕は少し申し訳ない気がした。

だから僕は葵姉の膝に置かれていた手を取り、そのやわらかい手を僕の手の中にその手を閉じ込めて、改めて誓いの言葉を口にした。もちろん葵姉と、そして自分自身への誓いを。

「うん。ちゃんと申し込めるのはいつになるか分かんないけど、葵姉を幸せにできるように、僕頑張るから。」

「・・・私も、聡太を幸せにできるように頑張る。」
頬を染めてそう言ってくれた葵姉に、

「約束だよ？」

と、そう囁いて唇を合わせた。

理由とキスと疑惑（前書き）

「葵×聡太」の5話目です。
ではごっご。

理由とキスと疑惑

予鈴に逢瀬を邪魔されて、葵姉と別れ自分の教室に向かっていると廊下で交わされる会話が耳に飛び込んできた。

「安田と石川が教室でキスしてたらしいぞ。」

「マジか？んな目立つところでよくやるな、つーか、あの二人なら気にしないか？」

無責任な伝聞の情報を笑う奴らを通り過ぎて教室に入ると、噂の二人を遠巻きにしながらも、とても気にしているクラスメート達。

そして、一向にそれを気にした風も無い当の二人がいた。

この教室内の雰囲気は、伝聞の情報の信憑性をかなり高めていた。

・・・まったく、どんな頑強な神経をしているんだか。僕は時々この二人が分からない。

何で人前でキス？

何でこの中で平然としていられるんだ？

でも、その二人に真偽を確認しようとしている僕も、実は結構な神経の持ち主なのかもしれない。

そんな自嘲の笑みを浮かべたまま僕は、朋ちゃんの席で話し込んでいる二人に近付いて声をかけた。

午前中の喧嘩の事は、もう今はどうでもいい。

「航、朋ちゃん、」

・・・が、話はそこまでしかできなかった。

「あ、聡太くんお帰り。」

「聡太つ、俺が悪かった！！」

・・・何が？

勢いよく縋りついてくる航に、僕は一步退いた。

「俺自分の事ばかりかでお前に嫉妬してた！」

「一体何の話だ？」

一方的に話す航は、確かに自分の事ばかりだが・・・嫉妬って何だ？

「俺、お前がねーちゃんとキスしてる写真見て、先越されて焦ってたんだ！」

「なっ、何大声で言っただお前!？」

「朋ちゃんは、やっぱり今も笑っている。」

「だから、謝っただ。」

「必死で真っ直ぐな航の気持ち分かる、だけど・・・」

「そうじゃなくてだな、頼むから僕まで巻き込む・・・」

まったく悪意の無い、ましてや謝罪の言葉を口にする航を、怒る気にもなれず・・・僕は抜けていく力に逆らわず、その場にしゃがみ込んで頭を抱えた。

航の機嫌が悪かった理由は、そんな事だったのか？

僕はただ、完全に八つ当たりされてただけじゃないか。

色々考えて、気を回して・・・それがものすごく損をしたような気分で・・・

何も分かってない航の、的外れに心配してくれる声と、朋ちゃんの笑い声だけが聞こえる。

しかし朋ちゃんは、いつも笑い過ぎだ。

・・・これ、そんなに面白いか？

僕は恥ずかしくて堪らないんだけどな・・・。

遠巻きにしている連中は、だまってこの成り行きを見守っているはずだ。

後でこの事を言いふらせるように、見逃さないように・・・

もちろんこの後、二人に向けられていた視線は僕にも向けられるだろう。

・・・お願い、僕は二人みたいな毛の生えた心臓なんか持ってない。ナイロンザイルのような神経はしてない。

・・・世の中には羞恥心つてもものがある事を、二人には是非とも理

解して欲しい。

予鈴を聞いて屋上から教室に戻り、何かの紙とにらめっこをしている美晴に話しかけた。例の話をするためだ。

お昼を聡太と一緒に過ごし、やっぱり一緒にいられる時間は多い方がいいなって、実感したから・・・膳は急げよね。

「ねえ美晴？ ちょっと話があるんだけど・・・いいかな？」
「なに？」

そう返事をしたけど、目は紙に向けられたままで、ちゃんと聞いているのかどうかよく分からない。

それでも、まあいいかと私は話を続けた。

美晴はこういう事が時々ある。何かに集中していると、どっぷりはまり込んでしまう。

「美晴ごめん、明日から聡太と一緒に学校行くね。」

「あ、そう。いいんじゃない？」

その返事はあっさりし過ぎで、私の方が困惑させられた。

あれ、そんなもの？

その時、ちょうど先生が教室に入って来たので、気になる事はあつつつも、そのまま自分の席に戻った。

実は聞いていないって事もあるかもしれないけど・・・でもそれはそれで、美晴のせいよね？

夕方、家に帰ってリビングに顔を出すと、定位置のソファに妹がいた。

「あ、お兄ちゃんお帰り。」

今は携帯ではなくテレビに向かい、録画しておいた番組を見てるらしい。

「ただいま。」

「……ってあれ？ 最近機嫌よかつたのに、今日は暗いじゃん、どしたの？ いきなり葵さんと喧嘩でもした？」

僕は葵姉との事を、妹には告げていない。

だがしかし、今の言葉はその事を知らなければ出てこない。

……つまり理佐は、僕と葵姉が付き合っている事を知っている。

そうか、最近理佐の態度が軟化したのは、葵姉との事を知ってたからか。

美晴さんと親密に繋がっている妹だ。

今日あの写真を渡された事で、初めて納得が行った。

……って事は、あの写真も見てるんだらうか？

新たな悩みの種に囚われそうになるが、ここは知らぬ振りを決め込む方がいいだろう。

「違う。その弟にムカついてるだけだ。」

「ふーん、ならいいや。」

あっさり流され……。いや、流してくれる方がありがたいんだが。再びテレビに意識を集中させている妹は、やっぱり機嫌が良い。

今見ているテレビの影響というのではなく……。最近、僕に接する時の態度が明らかに変わった。

今朝、美晴さんに言われた台詞。

『やるじゃん、見直したよ。』

もし、そういう事なのならば、やっぱり妹はその事実を知っているという訳で。

……僕はいつまで耐えられるだろう？

一人気まずいものを抱えて、足音を立てないように静かに後退りりビングから出た。

そして、そのまま自分の部屋に向かう。

……これは敵前逃亡ではない、戦略的撤退だ。

そう、内心で自分自身に言い訳をしながら。

どこかで読んだ台詞の引用なのだが、今の僕の心境にピッタリだと思った。

私と弟と友人（前書き）

「葵×聡太」の6話目です。
ではどうぞ。

私と弟と友人

以前に一度、図書室で借りて読んだ本を、この間自分で買ってしま
った。

アメリカの恋愛小説の日本語訳。

ストーリーにドキドキしながら読み進め、返すのが惜しくなる程は
まってしまった。

ハードカバーの少し値の張る本を、それでも、おこづいかいから出
したお金は惜しくなかった。

そして今、二度目の本は、その美しい言葉で私を魅了している。

色々な日本語の表現がある中で、この訳は見事な言葉を選んで纏め
られていると思う。

それが、この翻訳家の腕・・・っていう事なのかもしれない。

紙に並ぶ文字を目で追って、少しうっとりしていたら、不意にノッ
クの音がして現実に引き戻された。

「はい？」

邪魔したのは誰よ？ と、少し不満に思いながら返事をするよ、

「ねーちゃん・・・ちよつといいか？」

と、息の上があった弟が、弾む呼吸を抑えながら顔を覗かせた。

カーテンの向こうはもう暗くなっているけど、航はまだ制服のまん
まで。

肩にはカバンがかかっていた。

「何？ 航どしたの？ 今帰りって、遅いじゃない。」

「まあな。」

いつもふざけた調子の弟は、何か今日は違ってて・・・いつもなら
何の用なのかと先を急かす所だけど、今はそうせずに言葉を待った。

「あのさ、その・・・良かったな、聡太とうまくいって。」

「な、何、急に？」

予想してない事を・・・元々何も予想なんかしてなかったけど、聡太との事を言われて顔が熱くなるのを感じた。

あ、今ちよつと笑ったでしょ？

でも、いつもみたいにバカにする感じじゃなくて・・・見守ってるような、何か大人っぽい表情をしてて、どうも調子が狂う。

「こないだはびっくりしてさあ、ほら、俺・・・まだちゃんと言っ
てなかったからさ・・・そんだけ。」

「航？」

・・・本当にどうしちゃったの航？

「ま、両思いおめでとう。・・・随分かかったけどな。」

そして、ドアが閉まった。

・・・随分って何？

え、ちよつといつから？

いつから航はそんな見守るような立場にいたの？

・・・ねえ、本当にいつからなの！？

「・・・そう、航そんな事言ったんだ。」

翌朝、初めて聡太と二人だけで学校に向かいながら、昨夜の弟の話をした。

聡太は呆れたとも、ホツとしたともとれる表情を見せた後、薄く笑った。

「航はずつと知ってたんだよ。葵姉が意識するよりずっと前から。」

「・・・そうなの？」

見上げて聞き返すと、

「うん。実は・・・皆みんななんだけどね。・・・僕らの周り。」

と、さらに驚かされた。

確かに私も美晴から突付かれたけど・・・。

「皆みんな！？」

「そう。航だけじゃなくて、美晴さんも、朋ちゃんも、うちの妹ま

で。」

・・・そうなんだ。

今迄ずっと、そういう目で見られていたのかと思うと、私はとても恥ずかしくて、言葉が出てこなかった。

すると、聡太は首ごと顔を背けて、

「見てると苛つくから、さっさとどうにかしろって・・・実は散々言われてたんだ。」

って、耳を真っ赤にして言うから、私は思わず笑ってしまった。

・・・本当は、人事じゃないんだけど、つい・・・可愛いって思ってしまったから。

進路指導室で近くの大学の資料を出してもらって、片っ端から眺めた。

第一希望は近くの大学。

家から通える事が必須条件。

でも、さすがに希望の学部くらい選ばないと・・・って。

だけど、正面にいる友人が、気になって気になって仕方がないのよね・・・。

「美晴どしたの？ 朝から元氣無いけど？」

同じように大学のファイルを出してもらった美晴は、机に顎ひじをついたまま生気の無い目をしていた。

普段エネルギーシユな分、こんな姿は稀で・・・また何か悩みでも抱え込んでるのかな？

って気になった。

だからと言って、美晴がその悩みを打ち明けてくれるなんて事は無いんだけどね。

毎回一人で何かを抱え込んで、気が付けばいつの間にか乗り越えていて、いつも通り。

美晴は、誰かに寄りかかるような事をしない。

強いのか、不器用なのか・・・どちらにしても、水臭いなんて思う部分はある。

「・・・お腹痛い。」

何？ 生理なの？・・・ならどうにもできないわね。

「あー、頑張れ。」

すっごく気にかけてた分、その返答にっかりしてしまった。

「何頑張ったら痛くないの？」

そういえば、美晴は生理痛がいつもひどいらしい。私は面倒だなとは思っけど、痛みなんてそんなに無いから、美晴を見てると不思議な気分になる。

「んー、気力？」

「そんなものでどうしろと・・・？ とりあえず、このファイルの学校名メモしといて、お願い・・・元気になったらまた調べるから今の私には無理だ・・・。」

ヨロヨロと上げた手でファイルを示している。

まったく、そんな弱々しい姿見せられたら、そのくらいの協力くらいしてあげなきゃって気になるじゃない。

「仕方無いわね・・・貸して。」

美晴はファイルをこっちへ押し出すと、力尽きたようにテーブルに突っ伏した。

本当、大変なのね。

そして、ふと物足りなさを覚えた。

「そういえば、今回は『生理なんかいらない』って言わないのね？ 毎回そう愚痴ってるのに、今日はまだその言葉を聞いていない。」

「・・・あー、そうだね。」

美晴まで今更気付いたかのような気だるそうな声で呟くと、少し動いて姿勢を変えた。

・・・本当に大変ね。

美晴には悪いけど、私は生理軽くてよかった。

って考えながら、学校名を写し終わったファイルを押し戻した。

私と弟と友人（後書き）

以前に書いた生理ネタは、これ（本当は次章のここ）の前振りでした。

二人で（前書き）

「葵×聡太」の7話目です。
ではごっご。

二人で

土曜日は、葵姉と二人でショッピングセンターに出かけた。

将来の事に頭を悩ませ、顔を曇らせがちな姿を案じた僕が連れ出したのだ。

ちよつと一緒にそこまで……って感じの、学生にありがちなお手軽なデートコースだけど、気分転換にはなるんじゃないかって。

昨日の夜電話して、急な話だったけど快諾してくれた。

そして今朝、家まで迎えに行くと、おばさんに驚かされた。

いつもよりテンション高くで迎えてくれて、

「上がつてお茶でもどう？」

と、少々強引に誘われて困っていると、

「母さん、もう出かけるんだから止めてよ。」

と、葵姉が断ってくれた。

……航が言つてた『信頼が厚い』とは何か違うような気がするが、歓迎されてるのは間違いないらしい。

別に何を買うつて目的は無いけど、適度に遊んで、無難にウインドウショッピングくらいで時間は潰せるだろう……と。

僕はそのくらいのつもりでいた。

けど、手近な入り口から店内に入ると、葵姉は服とか雑貨とかそんなものには目もくれず、

「じゃあまずは、本屋に行こう。」

つて、僕を置いてく勢いで歩き始めた。

これは、何かデートって感じじゃないな。

でもまあ、しつかり気分転換になつてるとみたくて良かったかな？

ここに入ってる本屋は結構な面積を使つて、その分、数も種類も多い。

少し珍しい本も置いてあり、僕もこの店は好きだ。

・・・でもその気持ちは、今の葵姉には敵わない気がする。

葵姉は、迷う事無く真っ直ぐと洋書の棚に向かい、ずらりと並ぶ様々な厚さのハードカバーの中から、熱心に何かを探している。左端から棚をじっと眺め、ゆっくりと右に移動していく。

・・・たぶん今、僕の存在は忘れられている。

そんな事を考えて苦笑しながら、僕は葵姉の姿を眺めていると、しばらくして、

「あ、あつた。」

やや控え気味ながらも、嬉しそうな弾む声を上げた。

僕はそれまで、適当な本をパラパラと捲りながら、しっかりとその真剣な姿を堪能させてもらった。

葵姉は見つけた本に手を伸ばしたものの、惜しいかな、その本は取れない。

ぎっしりと詰め込まれた棚の、少し高い位置にあつた本の背にかけた手は滑り、空を切っただけで葵姉には動かせなかった。

何度か試すも結果は変わらず、本はまったく動かない。

その様が可愛らしくて、しばらく観察していたもの・・・

でもそろそろ限界かなと、僕は横から手を伸ばし背の上部に指をかけ、少しだけ引き出した。

「どうぞ。」

限界なのはもちろん葵姉。

これ以上放っておくと、取れないのが恥ずかしくて怒りだす。そして、僕が取ってあげても拗ねる。

だから途中まで引き出した。

「ありがと、聡太。」

ようやく意中の本を手にした葵姉は、それを抱えて笑顔を見せた。

・・・これが長い付き合いの中で学んだ、葵姉の扱い方だ。

葵姉の目的の本は、何となく見覚えがあった。

表紙に少し違和感があるのは、そこに書かれた文字がすべて英語であるせいだろう。

そして、記憶より少し大きい。サイズと文字さえ違えば、以前に本屋の入り口辺りでよく平積みされていた本と同じ物だ。

・・・ちなみに僕は読んでいない。

確か、恋愛物っぽいポップが添えられていて、それだけで僕はスル―した。

「英語の原文なんだ？」

「うん、翻訳の本読んで面白かったら、原文も読んでみたくなっちゃって。・・・もちろん辞書を片手にだけどね。」

「へえ・・・。」

意外だった。

恋愛物は意外でも何でもないけど。何せ葵姉が読んでる本の8割くらいが恋愛物だ。

でも、原文にまで手を出そうとするとは思いもしなかった。

「英語好き？」

「うん、結構好きかな。日本語よりもっと合理化されてる感じがするけど、そういうのも面白いなって。」

「ああ・・・確かにそうかもね。」

「うん。で、比較してみたいなって思ったの。日本語は表現の種類が多くなって、翻訳した人次第でまったく違う作品になるんだなって、それが凄いなって感動したの。」

訳された物があるのだから、それを読めば話の筋は分かるし、正直そこまでする必要があるのかわかって・・・実はそう失礼な事も考えていた。

けど、今の話は納得がいった。

「葵姉はそういうのに興味があるんだ？ なら将来は翻訳家とかも

いいかもね？」

「将来？」

悩んでるのを知ってるから、僕はわざとその言葉を使った。

葵姉の事だから、最終的にはきちんと葵姉が自分で選ばなければならぬと思う。

けど、好きこそ物の上手なれって言葉の通り、好きな事なら学ぶ意欲も相当だろう。

指標くらのつもりで、そう口にした。

僕はあくまでも、気付いて無い部分を指摘しただけだ。さっき語った顔から察するに、出過ぎた真似では無いと思う。

葵姉は、一瞬目を丸くした後、右手を顎に当て、その右手を組んだ左手で支え、有らぬ方を見て何かを考え始めた。

・・・また僕は置いて行かれた感じだな。

きつと脳内で激しい会議が行われているんだろう。

「・・・そうね、そういうのもいいかもしれない。」

会議の議論をきちんと纏め上げ、きちんと答えを出して、ようやく戻ってきた葵姉は、曇りの晴れたキラキラする目で、今日この店に来て、初めて僕をまともに見てくれたような気がした。

見えてきたもの(前書き)

「葵×聡太」の最終話です。
ではごじじぞ。

見えてきたもの

「ほう、欧米文学の英語か。いいんじゃないか？」

週明けの休み時間に、進路の方向・・・って言うか、聡太に進められて考えた事を、職員室の岡崎先生に報告しに行った。

やっぱり結構あっさりしてる気はするけど、

「うん、安田は英語の成績いいから、いいとこ選んだんじゃないか？」

って言ってくれて、一方的に毛嫌いしてるのも良くないかなって、ちよつと反省した。

ちゃんと私の成績の事を頭に置いて、先生なりにきちんに対応してくれてるんだなって、少し申し訳なく思った。

「おつ、そうだ安田・・・聞きたい事があつたんだ。」

「何ですか？」

「お前、1年の為井と付き合ってるんだって？」

前言撤回。

「・・・何で知ってるんですか？」

「有名人が何言ってるんだ、元々確実な筋から聞いてはいたんだが・・・噂は怖いな。」

無責任に含み笑いを向けるこの先生は、やっぱり好きになれない。つて、噂？

「噂って何ですか？」

「キスしてたとか、仲良く登校とか？ ま、そのうちお前の耳にも入るんじゃないか？」そして今度は声を上げて笑われた。

否定できない事を言われた私は、顔を赤くするしかなくて・・・消え入りたいってこういう時に使う言葉よね？

でも消えられはしないから、私はここからどうやって逃げればいいのかな？

つて、どこか冷静な部分が妙な事を考えていた。

「そうだ、いい事教えてやろうか？」

そんな時、先生が逃げ道をくれた。

やり過ぎたかなって顔してる先生は、驚きの事実を私に教えてくれた。

「大垣にも彼氏がいるぞ。」

「・・・美晴に？」

「そ、やっぱり安田も知らなかったか。こないだ男はいるのかって聞いたら、思いつきり顔に出ててな・・・結局、怒って逃げた。」

思い出し笑いをする先生に、軽く頭を下げて失礼しますと辞した後、職員室から急いで教室に戻った。

そして、自分の席でデジカメを弄いじっている美晴に詰め寄った。

「・・・何、そんな勢いよく来て？」

思いつきり引かれてるけど関係ない。

「美晴、いつから彼氏いるの？」

「は？」

困惑の表情に、泳ぐ視線・・・これは事実だ。

今、先生から聞いたばかりの話を、本人に突きつけての事実確認はあっさりとできた。

「美晴ずるい、私の方ばかりチョツカイかけるくせに、いつも自分の事は全然言ってくれないじゃない。」

「突然何？ ずるいつて言われても困るんだけど・・・。」

そう言いながら、デジカメを不自然に仕舞おうとするのを私は見逃さなかった。

「ひょっとして、そこに写ってる？」

ビクツと肩を揺らし、黙り込む美晴の手からデジカメを取り上げた。

「私達のおんな写真撮ってくれるくらいなもの・・・見るくらい平気よね？」

私はできるだけ冷たい声を出した。

仕返して事にしたって問題ないわよね？

「うつ・・・あーもう、好きにして。」

うんうん、開き直って投げ出すのが早いのは、こういつ時便利ね。

「はい、好きにします。」

電源をONにし、再生モードで順に見ようとしたら、

「逆からの方が早い。」

機嫌の悪い声で親切な事を言ってくれた。

「そう。」

そのアドバイスに従って、逆に送るとすぐに二人の写真が出てきた。

「へー、格好良いじゃない。年上・・・だよな？」

「・・・うん、3つ上。」

「ねえ、笑っていい？」

「何を!？」

「美晴もこんな顔するんだなって。」

ちよつと大人の男の人と並ぶ美晴は、幸せそうな女の子だった。

普段は澄ましてるか、ふざけてるかのどっちかで、あんまり見た事の無いその表情が、何となく嬉しくて・・・笑いたくなった。

お昼の屋上で、聡太と一緒に昼をしながら話した。

私達が噂になってるって事と、美晴の彼氏の件だ。

噂の方は思い当たる事があるらしく、仕方が無いかなって力無く笑って、経緯を教えてくれた。

・・・うちの弟のせいなのかと、その理由が分かれると、力が抜けた。

一方、美晴の彼氏の話は、予想以上の反応で、

「何で? どうしてあんな人がいいんだ？」

って、結構ひどい事言ってるない?

・・・聡太と美晴って、そんなに仲悪かったかな?

「私は美晴の事好きだけどなー、元気で真っ直ぐで、見てると面白

くて。だから、好みは人それぞれだよね。」
だから、ちよつと諫めた。

だって本当は私の方がお姉さんなんだもの。聡太の方が何か大人みたいで、普段はあんまりそんな気がしないんだけど……。

「そうだけど……。」

「ね、幸せならいいんじゃない？」

渋る様子に、もう一度念を押すと、

「……ま、そうかもね。」

と、何となくって感じながらも納得したような返事をして、急に私を引き寄せた。

「僕も幸せだから……ね？」

とても近くでそう囁かれ、目を閉じた私は、何も見えなくなった。

見えてきたもの（後書き）

如何でしたでしょうか？

この二人の話は、

「恥ずかしがったら負けだ!!」

と、何度か気合を入れ直しました。

うん、気を抜くと照れる。

お次は「美晴×芳彰」のお話です。

色に悩む(前書き)

ここから「美晴×芳彰」の話です。
ではごじじぞ。

そう聞かれ、芳彰にカメラを奪われて・・・キスされた事を思い出した。

「最初から・・・あ、こ、この写真の辺りまでは・・・。」
結局その後、芳彰の部屋に連れ込まれて・・・

「えーと、うん、まー、大体。」

本当にその写真のとこまでしか知らないよ。

この後どうしたのか気になるけど、私はそれ所じゃなかった。

・・・これ以上何か言つと、私の方が墓穴を掘りそうだ。

あんな事考えながら平然としてられるほど、私はまだ大人じゃない。でも、これだけは言っておきたい。

「キスまでするとは思わなかった。やるね、聡太くん。」

うん、そこは見直した。

さすが男の子。

・・・そっか、男の子・・・なんだよな。

「おーい、聡太くん、こっちこっち。」

聡太くんのクラスの入口で手招きしながら名前を呼ぶと、先に航が釣れた。

相変わらず仲がいいんだな。って、私と葵も似たようなものか。

「美晴どしたんだ？」

「ああ、ちよつと渡すものがあつてさ、これなんだけど。」

葵に渡したのと同じ封筒を出すと、航が封筒を取るより前に、突進して来た聡太くんが奪い取った。さすが聡太くん、察しがいいな。

「何だ聡太、必死っばいな？」

「そりゃ、相手が美晴さんだからね・・・。」

驚いた航の質問に対してのその答えは、ちよつと心外だな・・・。

「じゃ、渡したから。あ、そうだ。」

あ、耳届かない。

・・・本当に男の子だな、大きくなるのが早いよ。

航もでかくなっちゃって。

仕方が無いから聡太くんの袖を引っ張って、少し前屈みになった所で耳打をした。

「やるじゃん、見直したよ。」

まったく・・・ずっとウジウジして、全然何の行動も起こさず、妹に苛々されてたのに・・・いざとなったらこれだ。

男の子はよくわかんないなって、現像した写真を改めて眺めて思った。

芳彰の切り替えのスイッチもよく分からないし・・・本当、男は謎の生き物だ。

こいつらも、そのうちに『男の子』から『男』になっていくのか？いや、もう二人とも彼女いて・・・『男』になるために踏み出してるんだよな。

自分の教室に戻りながら、そんな事を考えている自分がとても恥ずかしくて、誰が気付いてるって訳でもないのに、笑って誤魔化した。

「じゃ、今日の放課後も面談があるので、該当者は勝手に帰ったり、遅れたりしないでくれよ。わざとやってくれたやつは・・・報復を覚悟しとけ。」

朝のHRの先生締め言葉で思い出した。

そっか、今日だったか。

冗談のように言う報復って言葉はきつと本気だ。あの先生ならきつとやる。

内申書の評価を下げるくらいなら、平気でやりかねない・・・たぶん。

けど、沸いた教室の中で、きつと私一人だけが違う事を考えていた。

進路希望の調査って名目の面談は、今日で3日目。

今日の1番最初なら余裕だけど、3番目……。

嫌だな、半端だ。

待つのも、終わる時間も。

もし遅くなったら、芳彰のとこ行けないかもしれない。

……でも、行くのも恥ずかしい気がしてきた。

あれ？ おかしいなあ……何で今更意識してるんだ私。

芳彰の事は大好きで、何だかホッとして……

だから側に居たくて……でもそうすると、襲われて……

嫌じゃないから拒否する気はないけど……でも、そう思ってる自

分が恥ずかしい。

色ボケ？

ああ……もう、駄目だ。

何か他の事を考えないと！

葵に写真を渡した時から、頭の中のどこかのネジが緩んだような……

・そんな気がして、芳彰との事ばかりを考えている自分が、ただひ

たすら恥ずかしかった。

色に悩む(後書き)

そんな時期ありませんか!?(笑)
変に意識しまくりに時期ですよ。

先生と未来のビジョン（前書き）

「美晴×芳彰」の2話目です。
ではごっしょ。

先生と未来のビジョン

面談場所の社会科準備室に行くと、岡崎先生はいつもの席じゃなくて、応接セツトのソファの方に座っていた。

「今日は公用だからコーヒーは無いぞ。」

正面に座ろうとした時にかかった声に、一瞬疑問符が頭を過ぎった。

「・・・別にコーヒー目当てで来てませんよ？」

「そうか？」

「・・・先生が猫舌からかうためだけに、出してるんだと思ってたんですけど・・・違ったんですか？」

「いやあ、前払いの礼だ。」

今、目を逸らした・・・凶星だな。

「・・・学校の経費ですよね、それ？」

「何の事だ？ さあ、はじめようか。」

先生はきつと、私をからかって遊ぶために自分から妙な事を言い出したんだろう。

けど、風向きが悪いと見て取って、あっさりとその話題を手放し本題に切り替えた。

手元のファイルから、以前私が提出した『進路希望調査書』を私の前に置き、それからその隣の先生に近い辺りに真っ白い紙を置いた。

「大垣、カメラマンになりたいのは分かったが、これじゃ具体性が無い。」

第一希望にそれだけ書かれた紙を、ボールペンでトントンと突付いた。

「・・・本当に見事な切り替えだな。私の方は、そんなに急に切り替えられない。」

「だって、小さい頃からそう思ってたからそれ以外の事は・・・。」

「そうじゃなくてだな、お前どうやってカメラマンになる気だ？」

「どうやって・・・ねえ。」

「具体的にはちよつと・・・」

「それと、どういう方向を目指してるんだ？ アーティスト系の作品作るのか、報道、写真館なんかもあるよな、それによって、学ぶ事が違うんじゃないのか？」

白い紙の上をボールペンが走り、話す内容が図解となって現れる。見事に口と手が動いてて、器用だなあと感心した。

「まさか、自力とか、いきなりどっかの写真家の弟子にしてくれとか、そういう無茶やる気だったか？」

「そういうつもりじゃないんですけど、何も考えてなかったというか・・・。」

「そうか、そういう手もあるな。」

私の苦笑いに先生は溜息を吐き、そして、私の内心を見透かしたように先を続けた。

「じゃあ、そういう無茶はするなよ？ ビジョンが足りないなら、もう一段入れて考えてみる。アーティスト系なら、美大やデザイン科のある大学、報道や写真館なら専門行って、手っ取り早く技術身につけて、後は実際にスキル上げてくもんだろっし。」

「・・・そっか、そうですよね。」

「後は・・・技術の方を特化させるのもいいが、まあ俺としては人の幅広げる大学の方を勧めるな。」

『美大・デザイン科』と書かれた場所をグルグルとボールペンが楕円を描き続ける。

「どうしてですか？」

ボールペンが急に止まり、別の位置に『凸』の形を描かれる。

そして、その中に『大学』と書き込まれた。

「そりゃ、確実に進学できそうな成績のやつには進学してもらった方が助かる。進学率上げた方が、俺の評価に繋がるってもんだからな。」

今度は上向きの矢印を書き入れた。

「・・・先生、正直過ぎですよ？」

「今更・・・お前相手にいい顔したって、得なんか無いだろ？ まあ、校内で売っぱらう写真ばかり撮ってないで、そういう所をきちんと考えてみる。」

・・・何だ、先生も完全に先生モードって訳じゃ無いんだな。

「そんなうもうあれは廃業ですよ。被写体同士がくつついちゃったから。」

そう言うと、先生はすごく残念そうな顔をした。

「そっか、お前が先なら安田がからかえたのにな・・・。どうも安田は片意地が張ってて扱いにくいんだよな。それに・・・ゆすりのネタが消えたのは、正直痛い。」

「・・・何ですか、それ？」

「お前使えたんだがな」、別に止める必要は無いんじゃないか？

ああいうのは夢を売るようなもので、アイドルの生写真と変わらんだろ？」

それは本気が、冗談か・・・どっちにしろ、さっきと逆の事を言いだした。

「嫌ですよ。先生は相変わらずひどい人ですね。」

「そうか？ お前は変に律儀だな。」

「そりゃ、彼氏彼女のいる人の写真売るって、何か詐欺っぽいじゃないですか。」

「・・・友人を勝手に商品にして、何が今更詐欺っぽいだ？」

「失礼ですね・・・肖像権料は払ってたからいいんです。」

・・・と、結局途中から雑談になってしまい・・・次の番の遠野くんが、「まだなんですか？」って待ちくたびれた顔を覗かせたので、ようやく面談は終わった。

結局、面談時間を15分くらいオーバーしていて、今日は芳彰のとこ行けないなって・・・ちょっとホッとした。

廊下を歩きながら『今日は学校の用で遅くなったから行けない』っ

てメールを送り、そんな自分に違和感を感じて叫びたくなった。
・・・でも大丈夫、叫んではいけない。

次の日の昼休みに、校内放送で担任に呼ばれた。

けれど、呼ばれる理由に心当たりがまるで無い。頼まれ事はいつも
社会科準備室で秘密裏だし・・・。

なのに今日は、他の先生がいる職員室で、一体何の用だろう？

首をかしげながら職員室の岡崎先生の席に行くと、三枚の紙を渡さ
れた。

「ざつと調べてみたが、写真のコンクールって色々あるんだな？」

「ソフトクリームの写真ですか？」

印字された一覧の中で一際異彩を放っていた『ソフトクリームの写
真コンクール』という文字に目を留め、そうか、昨日の進路の話の
続きなのかと今更ながらに納得がいった。

「他にも色々あったぞ、天然石とか、箱に入ったペットとか、あと
撮影場所指定の地域活性化が狙いのものが多かったな。」

ほらと先生は、ノートPCの画面を示す。

そこには x の四季や、x の自然、わが町x xの写真、等色々
地名が並んでいた。

「はあ、こんな色々まとめてあるサイトあるんですね。」

「ま、良さそうなのに応募してみる、賞金、賞品色々だぞ。」

「・・・先生、俗物ですね。」

「そりゃ、にんじんがあつた方が励みになるだろう？」

「かもしれませんが・・・。」

それが目的って言うのは、何か違う気がした。

「そつだ、お前はどうかんだ？」

そう言った先生は、何故かにやついた顔をして・・・前後の関
係性からも何を言っているのか、さっぱり訳が分からない。

「何がですか？」

「安田はくつついたんだろ？ お前の方は？ 男はいないのか？」

・・・今の質問で、誰がそこまで理解できる？

私はその質問に返事をしなかった。

・・・なのに、先生はいいネタを見つけたとばかりに、口の端を吊り上げてニヤリと笑ってくれた。

「そうかそうか、さすが春だな・・・初々しいねえ。」

やたらと満足そうな先生に、

「・・・失礼します。」

私は、そう一方的に言い捨てて背を向けた。

教室に戻って、改めて一覽を眺めた。

賞金も賞品も魅力的だと思わない訳じゃないけど、そうじゃなくて自分の作品を発表するという事に高揚感を覚えた。

でも少し怖い気もする。

今まで自己満足で撮りたいものを撮っていたけど、そこまでだった・・・作品を、自分の思いを込めたそれを人に見せるって、どんなものなんだろう？

気恥ずかしい気がするのには、自信が無い証拠・・・自信を持って、胸を張って、自分の思いを伝えられるものを生み出さなくてはいけない・・・って事だよな。

・・・母さんってすごいんだな。

今更ながらに、身近なカメラマンである自分の親に尊敬の念を抱き、そして、もう一人の顔を思い浮かべた。

そういえば、その途中で、葵が何か言っていた気がする。

あんまり聞いてなかったけど、何か適当な返事をしたような気がする・・・けど、まあいいや。

先生と未来のビジョン（後書き）

短編の「Blanc jour」の先生部分は、ここでさらっと先生を出すための前振りでした。

今後、もう一回あります。

「写真」も同じ話の前振りです。

あと3つ先かな？

恋人との時間（前書き）

「美晴×芳彰」の3話目です。
ではどうぞ。

恋人との時間

これは何の絵になるのだろうか？

恥ずかしいって思う部分はあるけど、やっぱり会いたくて・・・今日は聞きたい事があるからって、自分に言い聞かせて芳彰の部屋に来た。

目の前の芳彰は、真っ白いキャンバスに鉛筆でスラスラと線を引いていく。

フリーハンドの曲線を7、8本引いた所で、イエローオーカーという名前のついた色の絵の具を、少量パレットに出してオイルでごく薄め、キャンバスに塗りたくった。

薄い黄色に覆われ、白い所が無くなった所でパレットが置かれ、筆は染筆用のオイルが入った容器に突っ込まれた。

「それで終わり？」

手を洗つてくると言つて立ち上がった芳彰に声をかけると、

「今はな、下地塗っただけだ。続きは乾いてから。」

そう言つと、どこか機嫌の良さそうな彼は部屋から消えた。

やっぱりこんな線だけじゃ分らないな。今まで芳彰が座っていた椅子の後ろから、極々薄い黄色のベールに閉じ込められた鉛筆の線を眺めても。芳彰の思い描こうとしているものは分からない。

「ねえ、これ何になるんだ？」

戻ってきた芳彰に聞いてみたけど、

「気にしてるみたいだから、内緒にしとく。」

「ひどっ、余計に気になるじゃないか。」

「じゃあ、気にしといて。」

まったく取り合ってくれず、後ろから抱きすくめられ・・・おまけにその手は胸を這う。

「んっ・・・ねえ、最近・・・意地悪くないか？」

「別にそんなつもりはないけど、だとしたらそれは、間違いなくお

前の影響だな。」

「や、あ……人のせいにするな。」

「嫌か？」

「……今聞くな、あつ。」

「じゃあ……。」

耳元で笑う声の主に、私はあっさりと屈服させられた……。

あーっもうっ！ 今日には絵を描く時の気持ちを聞いてみよっと思っ
てたのにー！！

「……やっぱり意地悪だ。」

不貞腐れて布団に潜り込んで、一向に出てくる様子が無い。

下だけ穿いて横に胡坐で座り、膨らむ布団を眺めるもの……さ
てどうしたものか。

理由が分からぬままに宥めてみても、効果は無く……もう諦めた。

「普段はお前に振り回されてばっかだからな。この時くらいは、俺
の好きにさせてもらっさ。」

本音だ。

「普段と違うから、嗜虐心が煽られるんだ。」

普段は強気な言葉を吐く口が、よがって啼く様は癖になる。

が、少し気になる所もある。

「……芳彰触り過ぎだ。段々よく分かんなくなってくるし……
そしたらベットに連れてかれるし……。」

布団の中から、くぐもった機嫌の悪い声が漏れてきた。

やっと話が進んだ。でもそれ、俺……怒られる事なのか？

「もう無理って言っても止めてくれないし……。」

「美晴……それ恥ずかしくてただけだろ？」

布団が少し動いた。当たり前だな？

「・・・だつて、私、」

「それじゃ、まったく触らない方がいいか？ やらない方がいいか？」

また布団が動いた。

「・・・それは・・・その、違う問題かなと・・・。」

そうだな、俺には無理だ。

布団をはがして引つ張り出すと、裸の美晴が抗議の声を上げる。

それに構わず捕まえて、意味深に囁く。

「あんな、無理つてそこを超えると、違う世界が見えるらしいぞ。」

「何それ？」

美晴は訝しがりながらも興味を示し、動きを止めた所を後ろから抱き込んで逃がさないようにした。

「あーっ、はめたな!？」

こういう方面に疎い美晴は、それ故に先入観がなく案外素直だ。

「はめてない、人それぞれらしいがトリップする事があるらしい。」

「・・・へえ、」

そして、元々好奇心が強く、おまけに前向きで、世話好き。

好奇心がすべてに勝るのもどうかと思うが、こうすれば大人しくなる。

後は羞恥心からくる抵抗感さえ無くなれば・・・きつと色々覚えてくれる。

「でもそういうのは精神的に開放されて無いと、無理らしい。」

「それは医大生の学習成果か？」

美晴の声が冷たい。

「・・・そういう事を研究してる人間がいて、本もたくさん出てるが・・・大学は関係ない」

「じゃあ自主学习だな？」

「・・・えーと、流れが変わったような気がする。」

「・・・あー、どうせ二人しかいないんだ、恥ずかしがる必要は無いだろう?」

「でもなあ、芳彰に見られてるの結構恥ずかしいよ？」

「俺は悶えてるお前を見てるのが楽しいし、嬉しい。もの凄く満足だ。」

「そっか、じゃあ私も、快樂に耐えてる芳彰を見てればいいよね？ やっぱり攻守が逆転している。」

「・・・だから、お前も俺が悦ばしてやってんのを素直に楽しんでみないか？」

「えーその言い方は、随分偉そうだな？」

「あーもう、そうじゃなくてだな・・・気持ちいいのは別に恥ずかしい事じゃない。お前は理性に縛られ過ぎてるところあるから、本能に従うのも悪い事ばつかじゃなくて・・・だから、俺と一緒にいてやってる事をもっと心から楽しんでくれ！・・・って、俺何言ってるんだよ、くそっ。」

腕の中の美晴が震えている。

そして堪えきれずに大笑いし始めた。

「笑うな、俺だっていっぱいいっぱいなんだ、途中で茶々入れやがって、もう最後グダグダじゃないか・・・。」

美晴は半身をひねって俺の方を向き、目で何かを訴えている。

押さえ込んでいた腕を緩めると、するりと向きを変え、首に手を回して抱きついてきた。

「一世一代の演説良く分かった。私もそう考える事にする。」
囁くような心からの言葉が耳元をくすぐる。

直に触れる温度と柔らかさも加わり、安堵の思いと、そして、愛しいと思う熱い感情が心を占めた。

「・・・でも、二回目やる時間は無いぞ？」

「気にするな。」

「はい？ 何を？」

最終的に、美晴を思い通りの方向へ誘導できた。そして、おそらくこの先も・・・。

しかし、俺の中にあるのは、満足感より敗北感で……
まったく、一筋縄ではいかないヤツだな。
でも、だからこそこんなに嵌^{はま}ってしまっただろう。
無邪気な様子で俺の上に跨る美晴にキスを落として……そのまま
押し倒した。

「……いつまでもそんな格好でいる方が悪い。」

抗議の声もやがては艶を含む吐息となり、そのうちに意味を成さない叫びに変わる。

やっぱりいいな、こいつ。

頭の隅でそう考えながら、征服感をしっかりと味わった。

恋人との時間（後書き）

ここがR15です。

物足りない方は、想像力で埋めて下さい。

芳彰くんは色々教え込もうとしてますが、そこ書いちゃうと

・・・18禁になるよね？

けど、ここの辺りのステップアップもこの二人のテーマだったりするので、

色々覚えてく美晴を、遠回しな表現で書いてくつもりです。

・・・ここは、別に恥ずかしくないんですよ、葵×聡太の方が恥ずかしい。

あのペアは真面目だから、逃げ道が無くって。

娘の夢／彼女の親（前書き）

「美晴×芳彰」の4話目です。
ではごっご。

娘の夢／彼女の親

一人だけ少し遅れて夕飯を頂き、食べ終わってソファに移動すると、それを見計らっていたらしい上の娘が隣に座った。

「美晴どしたの？」

「うん、聞きたい事があるんだけど・・・いい？」

切り出し難そうにしているのが、とても気になる。悩みでもあるのかしら？

「なあに？」

「・・・あのね母さんは何で今の仕事選んだの？」

「なんだ・・・真面目な質問ね、進路の事で？」

そう問うと、娘は首を縦に振った。

「母さんは、お父さん・・・美晴のお爺ちゃんの影響ね。」

「お爺ちゃん？」

「そ、何かある度に大きなカメラ持ってね、家族の写真を撮ったの。でもね、おじいちゃんの写真ってあんまりないのよ・・・当然なんだけどね、だから私が撮ってあげたいって思ったの。」

「へー、確かによくカメラ持ってたね。」

「でしょ？ だけど大きくなっていざカメラ向けたら、恥ずかしがつてあんまり撮らしてくれなかったのよね。」

思いがけず昔の事を思い出して、何となく心がじんわりしてくる。亡くなって随分過ぎた事もあるけど、色々あったからあまり思い出す事も無くなっていた。親不孝な娘でごめんねって今度お墓に謝りに行くのかしら。

「そうなの？ 私結構お爺ちゃんの写真撮ってたよ？」

「・・・え？」

「お爺ちゃんのカメラ借りて遊んでたよ。美晴は上手だなーって、次行った時に現像したのを見せてくれた。」

父さん・・・娘と孫は違うって事？ 謝りにじゃなくて問い質しに

行きたいわ。

「そう・・・なのね。」

「うん、それと・・・写真撮る時ってどんな事考えてる？」
複雑な気分を抱えていると、別の質問に変わっていた。

「・・・ああ、そうね、今は幸せな瞬間を収めるのが多いから、最高の笑顔を引き出せるようにって事かしらね、」

「そっか・・・。」

そう言っただけで黙り込んだ娘は、険しい顔をしていた。

「お母さんの事は参考になる？」

「うん、・・・私もね、母さん見ててカメラマンになりたいうって、ずっと漠然と思ってたんだ。だけど具体的な事は全然でさ、何撮りたいんだろうって、今それを考えてる所。」
そういう事は初めて聞いた気がする。

小さい時は確かにそう言っただけで、今でもそう考えていたとは・・・とても以外だった。

「美晴・・・本当にカメラマンになりたかったの？」

私の時間は不規則で、美晴に迷惑かけてばかりいて・・・娘二人に寂しい思いをさせてきたと、ずっとどこかですまない気分だったのに・・・

「何？・・・何かおかしい？」

「ううん、蛙の子は蛙って思っただけ。」

だから、そう思ってくれているのがとても嬉しくて、訝しげな顔をする娘につい抱きついた。

「ちよつと、苦しい。」

けれど美晴は本当に苦しいのか、それとも照れているのか抵抗を示して逃げようとしてくれた。

・・・思春期なんてそういうものよね。小さい頃は抱っこしてって、うるさかったくせに。

諦めて手を放すと、少し距離を取った位置に座り直されてしまった。

「ねえ、美晴・・・お母さんも一つ聞いていい？」

「何？」

「彼とはうまくいつてるの？」

「なっ！？ 何聞いてくんの??？」

あんまり抵抗してくれるから仕返しに決まってるじゃない。

お母さん寂しいのよ？

「どうなの？」

「……いつてるよ。」

目を逸らして、ぶっきらぼうに言い捨てるなんて、可愛い。

「うんよかった。そういえば……胸大きくなったでしょ？」

「……一つって言ったよね？」

「あら、これは確認よ？ いいわよねー、まだまだこれからで。私なんかあなた達のお陰で、減っちゃったっていうのに……。」

まったく、それじゃ肯定しているようなものよ。でも、新しく買ってた下着のサイズを確認したから、間違いないんだけどね。

上の娘の態度に気を良くした私は、美晴が照れてお風呂に逃げた隙に、以前からやりたかった事を実行に移す事にした。

「和歌奈？」

「お母さん何？」

下の娘の部屋に行き、ベッドの上で雑誌を読んでいた娘に耳打ちした。

「それ本気？」

「面白そうでしょ？ もちろん協力してくれるわよね？」

絵を描いていると、携帯が鳴った。

慌ててパレットと筆を置いて、携帯を開くと、

時間は9時18分。表示された名前は和歌奈ちゃん？

「もしもし？」

「あ、夜にごめんなさい、和歌奈です。」

「いや、いいけど・・・どしたの？」

この子はいつも唐突だ。

別に普段やりとりをしている間柄でもなく、前に美晴の行方を聞いて、

それつきりだったのだが・・・

「あのね、どうしても話したいって人がいてね・・・今変わるから。」

「・・・そう。」

とうとうきた・・・正直そう思った。

「もしもし、ごめんなさいね驚かしちゃって、私二人の母親です。」

「・・・あ、ども始めまして、宮原芳彰です。」

やっぱり。

いつかやられると思っていた。

「うん、芳彰くんよね、夜にごめんなさいね・・・美晴のいない隙にやってるから、

もちろんあなたも内緒にしてね、まだばれるとつままないから。」

「はあ・・・」

「私、あなたに会ってみたいんだけどいいかしら？」

「どうぞ自由。こちらはいつでもいいですよ。」

「そう？ じゃあ明後日の12時に、『ル・シユークリエールLe succrier』って喫茶店・・・知ってる？」

「いいえ、知りません。」

「そっか、じゃあ後で詳しいメール送るから、そろそろあの子お風呂から上がってきちゃうからそれだけね・・・慌しくてごめんな

さいね。」

「いえ、」

「じゃあ、明後日楽しみにしてるわね。」

「はい、こちらこそ。」

可笑しくて、電話が切れてすぐ吹き出した。さすがあいつの親だ・・・やる事が似ている。正しくは、美晴の方が親譲りなのだろうが。普段は俺が美晴に振り回されっぱなしだが、あいつもこうやって親にはめらるんだと思うと、可笑しくて仕方がない。けど、そう笑ってばかりもいられない。・・・きつと俺も明後日は大変な思いをする事になるのだろう。

間もなく携帯にメールが届き、母親の言っていた通りそこには店の名前と住所が記されていた。ノートパソコンの電源を入れ、起動するまでの時間を使って、簡単ながらもメールの返事をした。それから起動したパソコンで、住所の場所をネット上の地図で見ると、確かにそこには同じ名前の店があった。大体の場所は分かったが、念のためにその地図は携帯に転送しておく事にして、今度は店名で検索してみた。引っ掛かった中に店自身のHPは無さそうだが、結構な数のブログの記事が引っ掛かっており、好意的文面のいくつかに目を通してみた。

娘の夢／彼女の親（後書き）

「あんたが飲んだから、胸が無くなった」

よく母親に言われてました・・・そして今、私も同じ事を思っ
たりします。

だから、ここに書いてみた。

胸筋が足りないのと、乳腺が萎んだんだという理解はあるのですが、
（理由は調べた）

うん、でもこの事実って、結構ショックなんだ・・・。

憂鬱な数日の始まりの日（前書き）

「美晴×芳彰」の5話目です。
ではごっしょ。

憂鬱な数日の始まりの日

朝目覚ましに起こされると嫌な感じがした。

下腹と腰の辺りに鈍い痛みを感じて、私は顔をしかめた。

・・・たぶん、来た。

起き上がってトイレに直行し、予想は確信に変わった。

・・・生理嫌だ。

いつもいつも、初日と二日目は生理痛に悩まされる。

相当な痛みなら、意地でも耐えてやる自信はある。

けれど、こういう中途半端な痛みには弱い・・・。

これは私の天敵だと言っても、過言ではないとすら思っている。

・・・そう自己正当化したくなるほど、私はブルーな気分だ。

いつも通り待ち合わせの場所で葵を待とうとして、ふと気付いた。そっぴや葵は、これからは聡太くんに行くとかかって言ってた気がする。

コンテストのリストに夢中で、あんまり話聞いてなかったけど、確かそうだ。

この浮かない日に、おまけにこんな仕打ち？　って思いたくなるけど、

・・・まあ、好きな人と一緒にいたいって気持ちは、私にだって分かる。

からかって憂さを晴らしたい所だけど、ま、我慢しますか。そっぴ一人で納得し、足を学校に向けた。

学校で会って、からかえばいいか・・・でもそれは、私にそんな元気があればの話だな。

進路指導室の膨大なファイルの中から、近くのデザイン課のある大学と、それより少しだけ遠い美大と、写真関係の専門学校のものを出してもらい、じっと眺めてみてるんだけど、今日はさっぱり記憶に刻み込めない。

「美晴どしたの？ 朝から元氣無いけど？」

同じように、近くの大学のファイルを出してもらった葵が、正面で私を眺めている。

「・・・お腹痛い。」

「あー、頑張れ。」

それだけで察してくれたけど、返ってきたのは冷たい声のエールだけだった。

「何頑張ったら痛くないの？」

「んー、氣力？」

「そんなものでどうしろと・・・？ とりあえず、このファイルの学校名メモしといて、お願い・・・元氣になったらまた調べるから、今の私には無理だ・・・。」

お腹に貼った使い捨てカイロを手で押し当てて、閉じたファイルを示した。

「仕方無いわね・・・貸して。」

承諾してくれた葵にファイルを押しやって、私は崩れるようにテーブルに突っ伏した。

そのまま、サラサラと微かに響く音を聞きながら、動くシャーペンをぼんやり眺めていると

「そういえば、今回は『生理なんかいらない』って言わないのね？」
って、文字を書きながら何気なく言われた一言に、血の氣が引いた。
「・・・あー、そうだね、」

これまでは、邪魔だと思っていなかったものが、今後は無くなると非常に困った事になるという事実に、今初めて氣が付き・・・
今の表情を葵に見られないように、腕を動かして顔を隠した。

「芳彰っ！」

玄関が開くと同時に、美晴の機嫌の悪い声がした。

何事だと思いつつも、触らぬ神に祟りなし・・・

一瞬そんな言葉が頭を掠めたが、再び名を呼ばれてしまった。

「芳彰、こっち来て。」

諦めて教科書を閉じ廊下に向かったものの、そこに声の主の姿は無い。ただいつもの紙袋だけがその場に存在していた。

「美晴・・・どこだ？」

「・・・ここ。」

先程とは打って変わって、弱々しい声が聞こえた。

声のした方向を見ると、玄関の隣の・・・寝室のドアが少しだけ開いている。

「何いきなり転がってんだ？」

俺の布団に丸くなって転がる美晴を見下ろしていると、

「・・・もう限界。」

そう言っつて布団を引き寄せ、さらに丸くなった。

・・・何が限界だ？

「どうした？」

わけが分からず横に座って頭を撫でるが、弱々しいながらも、相当に機嫌が悪そうな声で否定されてしまった。

「そんなところより、お腹に手を当てて。」

言われるままに美晴の腹に手を当てると、がっちり腕を掴まれて抱え込まれた。

「温かい・・・やっぱり自分の手を当ててるより、人の手の方がいいな。」

その言葉と行動で、ようやく俺は合点がいった。

「ひょっとして生理か？・・・お前そんなに酷いのか？」

「初日と二日目は痛い。あと、立ちっ放しが堪えた。もう少しで終わるって我慢してたから。」

我慢しなくても休めばいいのに。だがしかし、そういう事をこいつは嫌う。

「こんな時は、別に俺の事なんか気にしなくなっただっていいのに。」

玄関の紙袋を思い出してそう言ったのだが、見事に一蹴された。

「嫌だ。今日は用がある。」

「何の？」

「大学がどんな所か聞きたい。」

やっぱりこういう事は、休学中とはいえ一応現役の人間に聞いてみるのが一番だろう。そう思ってここに来た。

・・・そうじゃなければ、今日みたいな日は絶対に来たくない。

芳彰にこんな姿なんか見せたくない・・・けど、痛さに負けた。悔しいけど、やせ我慢すらできなかった。

せいぜい、八つ当たりしないようにするのが精一杯だ。

だけど、芳彰の手をお腹に当てて、こうやってしがみ付いてると、何だかホツとた。

最初のうちは、ちゃんと質問して話を聞いてただけど、そのうち安心感に負けてしまった。

・・・今日の私は負けてばっかだ。

本当、生理なんか嫌いだ。

人に質問しといて・・・途中で寝るなつての。

掴まれていた腕を引き抜いても、美晴はまつ毛を揺らしたただけで、一向に起きる気配は無い。

「おい起きろ。」

何度か体を揺すってようやく目を開けたが、

「嫌だ、痛い。」

と、不満を漏らして、再び目を閉じようとする。

だからと言って、さすがにこのまま寝かしておく訳にはいかない。俺は構わないが、美晴の方が後で困るだろう。

「こらこら寝るな。帰らないとまずいだろっ?」

「ここがいい。」

即答して向きを変え、俺の足に縋りつく。

・・・まったく寝起きは別人だな。

普段は自分からこんなにくっついてくる事なんか無いくせに。くそっ、生理でさえなければ、喜んで手を出すものを・・・。

「良くないから・・・自分の部屋で寝ろ。」

「・・・歩きたくない。」

幸せそうな顔して、再び目を閉じる美晴の姿に、俺は諦めた。

「分かった。・・・連れてくから、帰ろうな?」

溜息混じりにそう言って、ポケットから出した携帯で電話をかけた。

憂鬱な数日の始まりの日（後書き）

最近生理痛がひどくなりました。

以前はそれほどでもなかったのですが・・・。

でも、無くなればいいのに！って、もう言えない二律背反。

（はい、昔は言っていました。ストレスで数ヶ月止まっていたりした事も）

必要性を感じていないけれど、妊娠も困るし、まだ閉経も悲しい。

・・・と、それは私の主張（^^）；

驚かされた（前書き）

「美晴×芳彰」の6話目です。
ではどうぞ。

驚かされた

チャイムが鳴ってドアを開けると、そこには芳彰さんが立っていた。そしてその背中には、眠ってるおねえちゃんがくっ付いている。眠ってるっていつか・・・しつかりしがみ付いてるから、寝ぼけてる？

先に電話で聞いていたけど、実際に目にした姿は予想以上の破壊力で、私はつい声を出すのも忘れ、二人を見上げて呆然と立ち尽くしてしまった。

「和歌奈ちゃん・・・上がって、美晴下ろしていいかな？」

そう、芳彰さんに苦笑いで言われ、ようやく正気に返った。

「あ、ゴメン。ビックリしちゃって。」

ドアを大きく開けて中を通し、後ろ手に持って来てくれた靴を受け取った。

それから、おねえちゃんの部屋のドアを開けると、ベッドにゆっくりとおねえちゃんを下ろし・・・さすがに重かったらしく、ベッドに座ったまま首を回し始めた。

「・・・あの、ありがと。おねえちゃんが迷惑かけてゴメンナサイ。」

「はた迷惑な姉の代わりに、礼を言って謝ると、」

「別にいいよ。」

つて、笑って言うてくれて、本当にいい人だな・・・。

それから、寝ているおねえちゃんの髪を何度か優しく撫でていた。

「じゃあ、俺は帰るから。」

そう言つて、立ち上がるうとした所で、おねえちゃんに服の端を掴まれてる事に気付き、少し困ったような笑みを見せた。

そんな恥ずかしいような、おねえちゃんの子供じみた行動に、芳彰さんは何となく嬉しそうで、解ほどいて服から剥がした手を少しの間握っていた。

結局おねえちゃんは朝まで寝てた。

朝早くに起きて、シャワーを浴びて・・・私はその物音で起こされた。

お風呂場は私の部屋の壁を挟んだ向こう側。カタカタとプラスチックの鳴る音や、水音なんかが、全部聞こえるんだからね。

必要以上に早起きさせられて、機嫌の悪い私に一向に構わず、おねえちゃんは濡れた髪のまま、昨日どうやって帰ってきたのかを必死になって聞いてきた。

・・・だから私はちゃんと話してあげた。あつた事を一つ残らず全部だ。

恥ずかしさのあまり、だんだん真っ赤になっていくおねえちゃんを見ているのは、少し胸がスツとした。

その後、気まずそうに部屋に戻って行っただけど、やっぱりそんな姿も幸せそうで・・・。

ちょっとだけ・・・そう、ちょっとだけ、おねえちゃんが羨ましいって思った。

朝の9時くらいに芳彰の所に行った。

今日は土曜で、学校が休みで・・・無論、昨日の事を謝るためだ。

しかし、鍵は開いておらず、チャイムを鳴らしても中から開く事は無かった。

「出かけてるのかな・・・？」

一人こぼして、芳彰に電話を試みたら、結構近い所で音がした。

いや、でも最初から入ってる電子音だし、他の人だろうな・・・なんて思ってたなら、繋がったと同時に音も止んだ。

「あ、芳彰。出かけてる？」

「悪い、すぐ戻るから。」

せっかく繋がった電話はその一言で切られてしまったものの、その

直後、本当にすぐ階段から本人の姿が現れた。

黒いジャージの下と、白地にシャープな赤いラインの両サイドに入ったTシャツ姿で、一瞬ドキツとした。

・・・本当、誰？ っと思っただ。

「どうもここにいると緩むらしい・・・最近運動不足気味だから、走ってた。」

説明しながら鍵を開けて、部屋に上がるも・・・後ろが付いて来る気配が無い。

振り返ると、美晴は微妙な顔して玄関に立ち尽くしていた。

「どうした？」

「あ・・・昨日はごめん、妹から聞いた・・・少しは自分でも覚えてるけど・・・。」

珍しくおらしい。

「別にいいって。」

確かに正直悩んだ。だから起こして帰らそうとした・・・が、無理だった。

一度和歌奈ちゃんに、家に連れて行かれた事もあるし、昨日はやましい事もしていないし、まあいいかと腹を括った。

結局家には和歌奈ちゃんだけで、そんな必要も無かったが。

・・・でもおそらく。いやきつと今日の昼以降は行き易くなるような気がする。

それは、予想というより確信に近い。

昼から会う予定のあいつの母親。電話だけだが、あの様子なら反対されている訳ではないだろう。

あの声からは、からかってやろうという・・・迷惑な意図が感じられた。

「それより、俺今からシャワー浴びるけどどうする？」

「何が？」

靴を脱ぎかけていた美晴は、怪訝な顔を俺に向けた。

「一緒に入る？」

残念ながら玄関のオレンジ色の光では、赤くなってる筈の顔が確認できない。

「それは・・・今は・・・遠慮する。」

「今は？」

「その・・・終わったら、改めて考える。」

即答で拒否されると思って言ってみただが・・・さすが美晴だ。美晴の考えそうな事を想像して、思わず笑ってしまった。

「じゃあ、終わるのを楽しみに待ってる。」

笑いながらそう言つと、美晴は再び靴を履き始めた。今は絶対、照れて怒ってるはずだ。

・・・これ以上からかうと、さすがに危険かな。

「そうだ。俺、昼から用事あっていないから。」

「あ？・・・うん分かった。」

動揺の抜けない声で返事をした後、
「じゃあまた。」

と残して、そそくさと逃げて行った。

もう少し声をかけるタイミングが遅ければ、上がっていっただろうか？

・・・まあ仕方無い。

悶えさせるのは楽しいんだが、それ以上できないのな。けどまあ、そのうち・・・

と、そんな事を考えながら、俺は風呂場に向かった。

驚かされた（後書き）

えーと、芳彰くんの頭の中は、当然18禁です（^^）；

「そのうち・・・」の先は何でしょう？

そりゃもちろんご奉仕ですよ？ ね？

・・・後書きが18禁になりそうだ。

雰囲気の良い店／感じの悪い男（前書き）

「美晴×芳彰」の7話目です。
ではごっしょ。

雰囲気の良い店／感じの悪い男

大通りから、馴染みのないそこそこの幅の道に入ってしばらく進んだその先に、目的の店はあった。

誰かの日記にあった、写真通りのシックな建物。

こういうレトロでモダンな雰囲気は嫌いじゃない。

ベルを響かせてドアを開けると、人の良さそうな店主がきちんと迎えてくれ、店内はレコードから流れ出る、ジャズの軽快なリズムで溢れていた。

内装も似せて作られた紛い物とは違って、時間を積み重ねる事でしか得られない風合いが滲み出っていて、とても好感が持てる。

壁に寄せて置かれているアップライトのピアノも、年代物と分かる木目調でバランスがいい。

美晴の母親はいい店を知っているな・・・と感心しかけたが、水のグラスを運んできたウェイターには首を傾げたくなった。

俺とたいして変わらない年頃の茶髪の男は、にこやかな笑みを浮かべて水を置いた後、そのまま俺の正面に座った。

「何ですか？」

行動の意味が分からず、そう尋ねると、

「宮原くんだよな？」

俺は知らないが、向こうは知ってるらしい。

久し振りだがよくある事だ。

親の知り合いという事もあるが、小中高と変に見られている事が多かった。・・・もちろん、あまり気持ちの良いものではない。

「そうですが、あなたは？」

「俺は北川文紘きたがわぶんじろ。たぶん知らないと思うけど、小中高と一緒だったんだよ。俺の方が二つ上だけだね。」

にこやかなままそう説明してくれたが、残念ながら記憶には無い。

「……すみません。」

「いいの、いいの。そっちは。」

そっち？　じゃあどっちだ？

「宮原くんは美晴ちゃんの彼氏だよな？」

確認事項の扱いで問われた言葉に、俺は一瞬返事に迷った。

こいつは誰だ、いや先輩らしいが、気安く美晴の名を呼ぶこいつの
関係は何だ？

……そう、色々頭の中で考えてみても、答えが出てくる訳も無く
ニコニコと笑う正面の人物を眺めても、疑問が深くなるだけだ。

「……そうです。」

結局は、ただ肯定するだけの答えを選ぶ他無い。

「美晴ちゃんって面白い子だよな。」

それは同感だが、こいつに言われると何だか面白くない。

「彼女以前は、アダルトな話は免疫無いからパスって言ってたのに
……最近はそのでも無いんだよな、それって、もちろん君のせい
だよな？」

何を聞いてくるんだこいつは!?

返事のしようが無くて……いや、必要無いのかもしれない。返事
などしなくてもペラペラと勝手に言いたい事を言っている。

「別にそれはいいんだけどさー、当人同士の問題だし……だけど、
ちゃんと大事にしてよ？　彼女いい子だからさ、見方は結構多いん
だよ？」

笑顔の彼は、途中で一度真面目な顔をして再び笑顔に戻り、言葉が
途切れた。

さすがにここの場面では、返事を求められているらしい。

「……大丈夫ですよ、美晴は俺にとっても恩人ですから。俺だっ
て、そんな悲しませるような真似する気無いですよ。」

「ほおー言うねえ。さすが美晴ちゃんを落とした男だ。高校の時の
イメージとは違って、宮原くんも実は面白そうな人だったんだね。」

「……それどういう意味です？」

店内の雰囲気をぶち壊しにして、少し不愉快な笑い声をあげる目の前の男は、

「もちろん褒めてるの。」

と、さらに笑う。やっぱりよく分からない。

「・・・あ、じゃあ頑張れよ。」

彼は急にそう言いながら立ち上がると、それと同時に入り口のベルが鳴り響いた。

「弘美さん、こっちこっち。」

入り口に向かつて手招きする彼を見上げた後、入り口の方を向くと、髪短いどこか美晴に似た顔立ちの女性が入ってきた所だった。

「あら、二人は知り合いなの？」

そう言いながら近づく女性・・・おそらく美晴の母親に、茶髪の男は、

「ニアミス程度かな。」

と言った。・・・微妙な言葉の選択だ。

「それは、見た事あるもしれないし、無いかもしれないってくらいなら、知らない人って事よね？」

・・・こんな考え方をするこの人は、美晴の母親で間違さそうだ。

「惜しい、俺だけ一方的に知っていた。が正解。」

そんなの当たらないだろう？

「そっか、残念。じゃあ、こっちは芳彰くんで正解よね？」

口とは裏腹に、残念のぞの字も見えない、値踏みするような笑顔を向けられた。

・・・これはかなりの曲者のようだ。

「はい。初めまして、宮原芳彰です。」

「あら、ご丁寧にどうも。私は美晴の母の大垣弘美です。」

立ち上がって名乗ると、向こうも立ったまま自己紹介をし、目を細めて座るように促された。

・・・まるで面接試験でも受けているような気分だが、あながち間

違いでは無いんだろう。

「うん、写真より格好良いわね。ってあら、何も頼んでないの？」
水だけが置かれたテーブルを見て、俺は疑問の顔を向けられたが、
注文を聞かれた覚えは無い。

その役を担う、カウンターの奥に引っ込んでいた北川とかいう先輩
は、しっかり聞き耳を立てていたらしく、

「あ、ごめん。俺、話す方に夢中で注文聞くの忘れてた・・・。」
と、トレイで半分顔を隠し、タイミングよく謝った。

雰囲気の良い店／感じの悪い男（後書き）

当初の予定では、文紘くんの出番はこんなに無かったはずなんです
が、

俺も俺も！・・・と、出てきました。

おかげで、フォローの短編一本いるかなーなんて、流れになりそう
です。

影響あるのは、まだ先ですけど。

本当・・・親子だ(前書き)

「美晴×芳彰」の8話目です。
ではごっご。

本当・・・親子だ

特にこだわりも無かったので、美晴の母親のお薦めだというコーヒを頼んだ。

照れ笑いの先輩が運んできたカップに口をつけると、苦味の少ないまるやかな口当たりで、俺は嫌いじゃない。

「どう？」

「いい感じですね、俺もこういうの好きです。」

「そう、良かった。」

正面で微笑む女性が、何年か先の美晴のようで、どこか不思議な気分がした。顎ひじについて悪戯っぽい笑みを浮かべる様は、本当に親子だなと妙に感心してしまった。

「後から思えば、時間って過ぎるの早いわよね。あのね、実は私も芳彰くんとはニアミスなのよ、正確には、あなたは小さかったから覚えてないだろうってどこかしら？」

娘に彼氏ができる歳になって、嬉しいけど、その分自分も歳を取ったんだなって、思い知らされるようで複雑だ。・・・という胸の内を聞いた後、そんな事を言い出した。

「どこかで会ってたんですか？」

「毎年家族で写真撮ってた写真館覚えてる？」

確かに小さい頃はそんな習慣があった。両親の結婚記念日に合わせて写真を撮ってもらっていた。しかしそれも、俺達が大きくなるにつれ途絶えてしまった。

「はい、それは覚えてます。」

「私その頃、その写真館で働いてたから・・・イタズラ放題のあなたの事すっかり覚えてるわよ。」

「そっつたりの顔で身を乗り出して・・・本当に美晴そのまんまだ。そうなんですか？ 確かに小道具触ったり、長いカーテンを引つ

張った記憶が断片的にあるような……。」

……彼女の親に小さい頃を知られているのは、どこか気恥ずかしい。

同じように小さい頃を知っている人はたくさんいるが、昔からずっと知っている人、母と仲の良い婦長の千佳子さんを初めとする病院の人、友人の親なんかとは、やっぱり気分が違う。

……でもまあこの感触だと、それはプラスに作用しているようなので、悪い事ではないのかも知れない。

「そうね。本当、芳彰くんは特別可愛かったから、それが美晴と……なんて、思いもなかったわ。不思議な縁よね。」

そう言った美晴の母親は、少し遠くを見ているような気がした。

縁……か、確かに美晴と会っていなければ、いや美晴が俺に干渉してこなければ……俺は今でも鬱々として、もがいているままだつたろう。

美晴のお陰で前を向く気になれたんだ。

「……本当に。不思議な縁だと思いますよ。」

「あら、その顔は色々ありそうね、よかったら教えて。」

美晴にも勝てないのに、その親に勝てるはずもなく、色々と問われるままに……出来うる限りだが答え……そう、気分はまな板上の鯉だ。

だが、いいテンポで入る相槌や、楽しそうに耳を傾けられてしまうと、そう悪い気もしなかった。おまけに、美晴の事も色々と教えてもらい、収穫は大きい。

「私はね、あなた達の事反対なんかしないから大丈夫よ。美晴は嬉しそうにしてるし……あなたが酷い人なら話は別だけど？」

「そんな事は……。」

「うん、そうじゃ無いから問題ないわよ。でも一つだけお願いがあるの。」

そう言つて、それまでテーブルの上についていた腕を伸ばして、人差し指を俺の前に立てた。

「何ですか？」

「あなた達がこの先どうなるかは分からないけど、もしもずっと一緒にいてくれる気があるなら・・・あんまり早くにいなくならないであげて。」

それは当然と言えば当然で・・・でも実は、自分ではどうする事もできない話で。そのための努力はできても、実行はとても難しい。そう・・・今俺は、そんな無理難題をお願いされている。けれど、俺もそうありたいと思う。

「はい。出来得る限りですけど。」

自分可愛さからではなく、美晴のために・・・って、これは覚悟か？・・・そうだな、俺にとつてもこれは願ってもない話だな。これで、親から先の確約を頂いたという事になるんだろつ。

「縁起でもない事言っちゃってゴメンネ。でも・・・こんなのは私だけで十分。娘達にはこれ以上寂しい思いさせたくないから。」
「気丈に笑う姿は、さすが美晴の母親だと思った。」

早くに夫に先立たれたからこそその言葉で、この親を見て育ったから、美晴はあんなに強いんだろつ。

「あ、そうだもう一ついい？」

「はい？」

「私の事は弘美って呼んでね？ お母さんって呼ばれるのは違つと思つし、おばさんって呼ばれるのは絶対に嫌だから。」

「お願いは一つじゃなかったか？」

「そう思いはしたものの、にこやかな美晴の母親に」

「分かりました、弘美さん。」

と、そう答えて、満足そうな表情を眺めた。

3時くらいにお母さんが帰ってきた。

「ただいま。あら？ 和歌奈一人？ 美晴は？ ねえ、どこ行ったか知らない？」

玄関で次々と質問を口にするお母さんの声に、私は仕方なく部屋から顔を覗かせた。

「おねえちゃんなら、カメラ持ってどっか行ったよ。」

「そっか、残念・・・いえ、好都合かしら？」

母さんは靴を脱いで、二足の靴をきれいに揃えながら、弾む声を出した。

「和歌奈、芳彰くん良い子ね。」

芳彰さんと会ってきたお母さんの感想の第一声は、それだった。

リビングでお茶を飲みながら話すお母さんは、とても機嫌が良い。

お母さんから見れば良い子かもしれないが、私から見るとそれは違う。

「良い子って言うか、良い人だと思うよ。昨日も寝ちゃったおねえちゃん背負って連れてきてくれたし。」

優しく、格好良いとも思う。

「何それ？ 彼そんな事までしてくれるの？」

興味津々な反応を示すお母さんに、私は先を続けた。

「でも、おねえちゃんは芳彰さんに甘え過ぎだと思う。普段はそんな事無いのに、芳彰さんの前だとさ・・・何か変なの。おねえちゃん別人みたい。」

「ただ、私の不満にお母さんは優しく微笑んでいた。」

「・・・だからお母さんは、二人の事歓迎してるのよ。」

そう言ってまたお茶を啜り、それから延々一時間半、今日話してきた事を聞かされた。

本当・・・親子だ（後書き）

文紘くんが「弘美さん」って呼んでるのも同じ理由です。

覚悟（前書き）

「美晴×芳彰」の9話目です。
ではごっしょ。

覚悟

デジカメを手にして、良さそうな瞬間を探してひたすら歩いた。

雲の多い青い空や、公園のサツキ、誰かの家の庭からはみ出した夕チアオイに、庭先のバラ、草に紛れたツリガネソウに、街灯に巻き付いた未だ咲かないヒルガオ、日陰に群生していたドクダミまで撮ってみただけ、どうもピンとこない。

今の所、自分の作品だと、胸を張って見せられるものが撮れた気はしない。

そうして歩いているうちに、土手に辿り着いた。

いつの間にか日は西にあり、川沿いを舐めるように吹く風に、半袖だった私は少し肌寒さを覚えて、脱いでいた上着を再び羽織った。

空の色はまだ水色で、しかし、いずれ沈む太陽はっ少しだけ大きい気がした。

流れながらその形を変えていく雲に魅せられ、デジカメを向けてみるものの、モニターに映る雲は実際に見るよりも遙かに魅力に欠け、1枚も撮らずに芝生に寝転んだ。

そして視界に緑が見えた。

風に揺られる桜の緑の葉が、不意に私の心を掴んだ。

・・・芳彰はあの木に寄りかかって空を見上げてたな。

起き上がって記憶を辿り、その光景を思い浮かべた。

あの時は、今より遙かに寒い11月。

寂しかった枝には緑の葉が盛大に茂っていて、あの時とは随分違うけど、ちよつとだけ・・・そう、ちよつとだけ真似がしたくなってみた。

結局、あの時何が見えていたのかは分からない。

空を見上げて、目に見えるものと、目に見えないものを見ようとし

ていた芳彰。

でも、今は何となく分かる。きっとその時に芳彰が抱いていた気持ち。・・・当時は史稀しきと呼んでいた芳彰と同じように、同じ木に寄りかかって空を眺めてみた。

西の空は薄っすらと茜の色を帯びはじめ、薄い水色へとつながる見事なグラデーションを、紫がかった朱鷺色のきれいな雲が邪魔をしている。

こういうものを見てみると、やっぱり心が弾む。

世の中には面白い人工物がたくさんあるけれど、結局自然の色には敵わない。ただ空を眺めるだけでもこの光景だ。

やはり諦めきれない私は、デジカメを空に向け、刻々と変わりゆく瞬間を夢中になってデータに変換した。

今日の成果を確認しようと再生モードに切り替えて下を向くと、随分日が傾いてきた川辺で遊ぶ、一人の女の子の姿があった。

・・・これも良さそうだ。

再び撮影モードに戻してカメラを構えるものの・・・遠い。

芝の土手を下りながらベストな距離を探し、何度かシャッターを切った後、実物の姿を見ると、何となく見覚えがある。

確か、航の彼女の・・・えーと、石川朋花いしかわともがちゃん？

よく見れば近くに航らしき姿もあり、それと誰か分からないけど、もう一人男の人が階段を走り下りて近付いて行った。

・・・まあいいか。

もし良い写真が撮れてたら、そのうち渡そう。

何か取り込み中のようなし・・・割って入る理由も無い。

今撮った写真を、一応モニターで確認だけして、土手を上がって家に向かって歩いた。

夕飯の後、撮ってきた写真をパソコンに取り込んで眺めた。

「んー思ったより暗いな。」

夕焼けの空は、ほぼ全滅。

タチアオイは、もう少し色が鮮やかなら・・・明度と彩度を弄れば良い感じになりそうだけど、それは邪道の気がする。

サツキは構図を間違えている。もう少し右に寄せれば良かったか？

ドクダミは漠然とした絵で、主張したいものがよく分からない。

かなりの数を撮ってきたものの、良さそうなのはほんの数枚。

写真は一瞬を捕らえる芸術・・・ってのなら、私はどれだけのものを逃がしたのか。

「難しいなー、もう。」

そうこぼしながら、頭の後ろで手を組んでイスの背もたれに寄りかかった。

ただ救いは、最後の写真が予想以上に良かった事。

夕日の反射する川面と、黒い少女のシルエット。

しかしこれは、私の腕ではなく偶然の産物だ。

構図以外は、光とタイミングが良かったのだろうとしか言いようが無い。

「本当、難しい・・・。」

それでも私は今、目元が緩み口元に笑みが浮かぶのを自覚している。遥かに高く、相当に険しい目標を見つけ、昂ぶっている。

・・・やってやるうじゃないか。

ディスプレイに並ぶ中途半端な写真達を見つめ、私はそう心に決めた。

覚悟（後書き）

まだ、このシリーズに入れてない「手を伸ばせば……。」に向かう第一歩。

こういう葛藤は、ワクワクして……とても怖いです。

自分にどれだけの覚悟があるか？

ただそういう事なんですけどね、

……私は2回逃げました。

そして、今3回目……逃げたくて仕方が無いのを、必死で留めます。

でも今このUP作業で、逃避中……

これ終わったら、ちゃんとネタ考えます。

何度でも・・・(前書き)

「美晴×芳彰」の最終話です。
ではごっご。

何度でも・・・

いつもの場所から、芳彰の後ろ姿とキャンバスを眺める。

7、8本のフリーハンドの曲線は、花びらを運ぶ川の流れになった。光の当たる鮮やかな新緑と、その向こうの暗い水。そして際立つ桜の花びら。

頭に描くイメージをしつかり形にしていく彼は、やっぱり凄いと思う。

変に捻り過ぎてた所が無くなって・・・でも、何かを主張しているようで、きつとしつかりタイトルも決まってるんだろっな。

『自分に素直になってみなよ』そう言ったら、そこからいきなり絵が変わった。

性格とか、表情も変わって、自分に素直になり過ぎだろう？ と思う部分もあるけど・・・それでも、尊敬できる人だと思う。

「・・・あのさ、やっぱりそんなに見られてると、集中できない。不意に振り向いた芳彰が、苦笑いでそう言った。

私が芳彰の部屋に来て、それを理由に絵を描くのを止めようとした彼に、

「別に気にしないでいいから、そのまま描いてて。」と、押し留めただけど・・・無理だったらしい。

「あ、ごめん。ちょっと見惚れてた。」

「はい？」

「やっぱり芳彰いいなあって。」

「・・・はあ、そりやどうも。」

芳彰は納得の行かないままの返事をし、パレットや筆を置くと、立ち上がって伸びをした。それから、少し意地の悪い声が出た。

「美晴、今何か悩んでる？」

「・・・何で、そう思う？」

私は内心ドキツとして・・・それを隠せもせず、真意を問い質した。

「お前が殊勝な時は、何か抱えてる。」

「・・・じゃあ普段は？」

「質たちが悪い。」

待て待て、何その答え？ 今、私確かにやった！って思ったけど、でもそれ彼氏の言葉じゃないよね？

相反する心の中の葛藤に、文句を言うタイミングを逃して黙ってる、ソファに引つ張られて背中から抱き込まれた。

「信念がありそうで、でも実は行き当たりばったりで、自信家に見えて、揺らぎつばなしで、誘ってるような行動するくせに、それが素で・・・そんな質の悪い天然子悪魔な、俺の彼女の頭を占める問題は一体何ですか？」

「・・・あー、彼氏ならではの言葉なのか。」

否定できない事ばかり並べ立てられ、思わず振り返って芳彰をまじまじと眺めた。

でも一つだけ否定したい。

「・・・誰が天然子悪魔だ？」

「もちろん、その自覚の無い美晴。素っ裸で抱きついてきて、それで誘って無いって言い張るのは、天然以外の何だって言うんだ？」

「だって本当にそんな気なんか無かったもん。」

「・・・何だろう、この余裕の笑みは？」

「ほら、だから天然だってんだ・・・。で？ 言うだけ言ってみろ。どうせお前がそんな時は、答えが決まってるんだ。口にすれば腹が決まるだろう？」

また芳彰は、何か変化を起こしている・・・私の知らない所で何があった？

「どうした？」

「あ・・・いや、・・・あのね、本気で写真を撮る事にした。」

昨日の夜決めた事を、今初めて声にした。

「そっか。」

それを一番に聞いてくれた人は、静かに・・・そして、少し重々しく受け止めてくれた。

「うん。難しくくて、腹が立つから・・・挑む。」

・・・けど、抱えられて触れてる部分から振動が伝わってくる。

こいつ、今笑ってくれたな？

笑うな！ と口を開こうとして、その言葉を飲み込む事になった。

「それでこそ美晴だ。」

穏やかで優しい声に、自分を認めてくれている事に・・・嬉しくて頬が緩んだ。

・・・芳彰は、何度私を惚れさせる気なんだ？

促されて向きを変え、見つめられて唇を寄せた。

その痺れるような感触に、切ない疼きを覚えるもの・・・伸びてくる芳彰の手を捕まえた。ほら、素直になり過ぎだ。

「・・・だから、まだ生理終わってない。」

「・・・はい。」

仕方無さそうに手を引っ込める芳彰は、でかいくせにかなり可愛いけど、それとこれとは話が別だ。

「後4日は我慢してもらおうよ？」

「・・・はいはい、」

やっぱり可愛い・・・。

「そっだ、最初の写真は芳彰撮らせて。」

可愛い芳彰を見ていると、そんな事を思いついた。

覚悟を聞いてくれたから、大好きな人だから、まず一番に撮りたかった。

・・・でも実は、4割くらい出来心だ。

いつも私はカメラを持ち歩いていて、今もパーカーのポケットに入っている。

だから、ソファの肘掛の辺りに置いたパーカーに手を伸ばすも……
渋面の芳彰に阻止される。

「……前にいっぱい撮っただろ？」

そんなの、まだ本名を知る前の話だ。今撮りたいものとは全然違う。
「決意を口にしての、最初一枚だよ。好きなもの撮りたいじゃん。」

「そう言っと、阻止する手は緩めず一瞬考え、」

「じゃあ、一緒に写るならいいぞ。」

そう提案してきた。

「どうやって？」

「セルフタイマー。」

平然とそんな事を言ってくれた。

「……それ、私が撮った事にならないだろう？」

「気にするな。」

「……この言葉を言う時の芳彰は、聞く耳なんか持ってなくて、
いつも向こうの都合で振り回され、好きにされる。」

「……それが悔しいから。」

私はセルフタイマーで、納得のいく写真が撮れるまで何度も何度も、
何度も取り直し、芳彰を辟易させてやった。

「……私を侮るな！」

何度でも・・・（後書き）

この二人はこんな感じですよ。

元々、ここをメインで考えてたので、一番ボリュームがあります。おまけに、悪ふざけ要員が多いので、一番よく動きます（^^）；

で、ラストの写真を葵に見られた訳です。

そして、芳彰が描いてた絵のタイトルは「門出」

川に落ちた花びらは、これから波に揉まれながら下って行く。

暗いのは先の見えない状態を表し、対照的に光の当たる新緑は周囲の応援を表します。

それでも人（花びら）は前に向かって進んで行く。

・・・ってそんなイメージです。

掲載日は6月の始め、作中の日付も5月下旬。

どうしようかなって、少し考えたんですが、そのままいきます。

これ考えたのは、桜いっぱいな時期だったんですよ。

でも桜って、新学期のそういうイメージだからいいかなって事で。

さて、次は「朋花×航」のお話です。

姉と親友（前書き）

ここから「朋花×航」のお話です。

前回、朋花が頑張ったので、今回は航に頑張ってもらいます。
ではどうぞ。

姉と親友

「私、今日から聡太と付き合う事になりました。」
外が暗くなってきた頃に帰ってきたねーちゃんは、そう唐突に宣言した。

あれは、5月半ばの土曜日だった。
少しソワソワしてて、でも堂々として、そして、かなり嬉しそうであれは相当舞い上がったたよな。

「・・・そう、良かったわね。」

夕飯のおかずの筍の天ぷらを、皿に盛り付けていた手を止めて、呆気にとられながらもそう言った母ちゃん。

あまりのシヨックに口をパクパクさせるものの、言葉の出て来ない父ちゃんと・・・リアクションはそれぞれだ。

そして俺は『やつとかよ』そう思うと同時に、『とうとうこの日が来た』と・・・そう思った。

多少複雑なものはあるものの、姉と親友・・・このごく身近な二人の事を、

きつと誰よりも、そして影ながら応援してきた身だ。
もちろん歓迎するしかないだろう？

だが、この時の俺は何も言えなかった。

ねーちゃんが、母ちゃんと詳しい話を始めたり、父ちゃんが色々あって、タイミングを逃したって事もあるけど・・・そうじゃなければ、ちゃんと言えたか？ って聞かれると実は自信が無かったりする。

でもこれだけは、はつきり言える。

これで不機嫌なねーちゃんの八つ当たりから解放される。

それは嬉しい！

週明けの月曜日。

いつもの朝のように家を出ると、

「おはよう。」

つて聡太が声をかけてきた。

今日はいつもと違って『遅い』じゃなかった。

一瞬驚いて、返事を返すのを忘れて聡太をまじまじとてしまったが、目を伏せて咳払いをし、少し改まる姿を見て、やっとピンと来た。報告つてやつか？ そう確信して、俺は聡太の言葉を待った。

「あのさ、航・・・僕と葵姉・・・付き合う事になったから。ピンゴだ。」

「土曜からだろ？」

間髪入れずにそう言つてやると、聡太は啞然としていた。そりゃそうだろうな。

聡太の事だから、どう話そうか、どう切り出そうかって、きっと色々考えたはずだ。

「知ってるのか？」

さっきまでのテンパってた部分はどこかにいって、素・・・を通り越して、かなり間抜けな顔してた。

朝からいいもん見れたなって、内心でほくそ笑む。

が、内心だけでは無かつたらしく・・・少し聡太の目が怖い。

「あー、夕方帰ってきたねーちゃんが、家族の前でいきなり宣言したんだ。」

「はっ？」

「宣言。今日から聡太と付き合う事になりました。って、父ちゃん声が出ないくらい動揺してて、哀れだったぞ。」

「・・・そう。」

聡太はかなり居心地悪そうにして、少し引いてるよな？

俺もあの姿には引いた。娘を溺愛って印象は無かつたんだがなー、

正直以外だった。

「ああ、おまけに後で泣きつかれた。いや、泣いてねーけど、今のお前はどんなヤツだって、しつこく聞かれた。」

「で？ 何て答えたんだ？」

「何も。」

「何もって・・・答えてないのか？」

「ああ、あんまりしつこいんで、途中から母ちゃんに怒られてた。

んで、聡太は好青年だから心配無いつてさ。お前、うちの母ちゃん
の信頼厚いもんない。」

聡太は、うちの母ちゃんに、相当気に入られている。

小さい頃から可愛いつて言われてるし、きちんとした性格で、成績
も良くて、何より毎朝俺を迎えに来るその根性が買われている。

いつも俺が遅く出て、いくら遅れそうになろうとも、変わらず翌日
には同じ時間にチャイムを鳴らす。

聡太のその行動は、俺からしたら、ねーちゃん目当てだって分かつ
てるけど、母ちゃんから見たら『友達思いの良い子』だったらしい。

「そっか。」

少し安堵した様子で苦笑いする聡太に、俺は一言だけ言ってやった。
「遅せえよ。」

毎朝のように言われてきた、この言葉。

これ一度、聡太に言ってみたかったんだ。

聡太は一瞬妙な顔をしたが、意味が分かれると、気まずそうに目を逸
らせやがった。

教室に入って、女子の友達と一緒にいた朋花の所に真っ直ぐ向かつ
た。

「朋花、朋花、ちょい話あんだけど。」

「あ、航おはよう。何、話って？」

「ちょい、こつちこつち、」

さすがに関係ない他の女子の前だと、聡太が怒るだろう。俺としてはその方がいいと思うんだが、テレ屋だからな……。だから、少し強引にながらも、朋花を聡太の席のどこまで引っ張って連れてきた。

「聡太がとうとう、うちのねーちゃんとかくつついた。」
後ろから聡太の両肩に手を置いて、そう告げた。

朋花だつてずっと気にしてたんだ、当然報告の義務はあるだろう？

「・・・何、この紹介？」

聡太は首を捻って半眼で俺を見上げてくる。

「・・・気にすんな、めでたい事じゃないか。」

「あ、本当？ それはおめでとう。」

ほら朋花も祝福してる。多少近くのやつらの視線も感じるが、それは些細な事だ。

きつとお前にやプラスになる。

ここから噂が広がれば、諦めるやつも出て、その分身軽になれるだろう？

「・・・そつか、じゃ本当に未来の義兄上に近付いたね。」

そう言った朋花にニヤリとに笑いかけられ、俺は再び複雑な気分に関われてしまったらしい。

俺は、どんな顔してたんだろう？

ちなみに聡太は、赤い顔して俯いていた。

「シスコンはみつともないよ。それとも私よりお姉さんがいい？」

そう朋花が言ってきて、驚いた。

「航も、うちのバカ兄貴みたいになる？ 堂々とシスコンやる？」

「・・・それは勘弁してくれ。」

俺、今あの人を思い出させるような顔してたのか？

「・・・あれはきつい。」

もしああなったら、人としての何かが終わるような気がする。

「それは嫌だ・・・俺、朋花が良い。いや、俺は別にそんなんじや

ねーよ。
「
・・・たぶん、
まだもう少し覚悟が足りないだけだ。

姉と親友（後書き）

実はこの話が、時系列的に一番最初です。

時間とキスと苛立つ俺（前書き）

「朋花×航」の2話目です。
ではごっしょ。

時間とキスと苛立つ俺

朝チャイムの音で、嬉しそうに出て行くねーちゃんを横目で見送り、俺はいつものように10分遅れで家を出た。すると今日は少し真面目な顔してて・・・

まだ何かあんのか!?

「航? そろそろ置いて行ってもいいか?」

そろそろ?

「何だ急に?」

確かにいつも待たせてるっちゃん待たせてる。

だが、これも俺の思いやり。

それを教えるような野暮はしねーけどな。

「急じゃない。まだわざと遅く出てくるつもりなら、僕は葵姉と行くぞ?」

うーん、思いつきりバレてるな。

「そっか、そうだなー、それも仕方ないかなー? 今は別にわざと

やってる気はねーんだけどさ、癖? もう習慣だよな。」

「・・・わかった。明日から実行に移す。」

そんなにふざけた気なんかねーのに、笑って誤魔化そうとはしたけど。

・・・こいつすぐ怒るんだよな。

「あ、ちよい、待って待って、義兄上!?!」

まあ、ねーちゃんと行きたいってんなら、そうすりゃいいって。

そうはつきり言ってくれと俺も楽だ。言い方にトゲがあるのは多少アレだが、顔見りゃしょうがねーかなーって思える。

「いいんじゃないか? 別に俺に気を使う必要はねえって、」

やたらと早く歩く聡太に小走りで追い着き、余裕の笑みをもって聡太の肩を叩いた。

「俺は、んな事干渉するほどシスコンじゃねーよ。」

そつだ、俺には朋花がいる・・・シスコンなんかじゃねーんだ！！

「おい、聡太くん、こっちこっち。」

知つた声につられて教室の入り口を見ると、美晴が聡太を呼んで手招きをしていた。

HRが始まるより前の時間だ。

聡太は心底嫌そうな顔してて・・・何か面白そうだな。

そう思つて、聡太より先に入り口に向かつた。

「美晴どしたんだ？」

「ああ、ちよつと渡すものがあつてさ、これなんだけど。」

そう言いながら美晴が出した緑色の封筒を受け取るうとしたら、横から物凄い勢いで奪い取られた。

啞然として横を見ると、怖い顔した聡太がいて美晴を睨んでた。

「何だ聡太、必死っぽいな？」

「そりゃ、相手が美晴さんだからね・・・。」

なるほど。こいつはまた、おもちゃにされてんのか。

朋花も気にしてか、こつちに近寄つて来てた。

「じゃ、渡したから。あ、そつだ。」

睨まれようがどうしようが、一向に気にしてない美晴は、戻ろうとした足を止め、聡太を引つ張つて何か言つていた。

そこに隙が生まれたらしい。

朋花は封筒を聡太の手からあつさり奪い取ると、あつという間にその中身を出して広げた。

『Good job!』つて賞賛するしかない見事さだつた。

封筒の中身は4枚の写真だつた。

「すごい、聡太くんどしたの!？」

朋花はテンション高く騒ぎ立てたが、俺はといえば、驚きのあまり

固まって声すら出せなかった。

「何で！？　ちょ、ちよつと・・・とりあえず返せっ！」

「へー、付き合いだしたつてのは聞いたけど、こんな事までしてたんだ？」

「・・・素直に行動しただけだ。」

「いいんじゃない？　ね、」

「・・・あ、ああ。」

正直二人のやり取りなんか耳に届いてなかった。

けど急に振られて、よく意味も分からないまま返事だけを返した。

俺のねーちゃんと、目の前の親友がキスしてる写真は、衝撃以外の何ものでも無い。

・・・けどまあ、そりゃ・・・好きで付き合いえば、そういう事もあるよな・・・したいよな。

つて、納得はできる。

けど、ねーちゃんは交際を宣言した時と同じ服で・・・。

つて事は、付き合いだした初日で・・・いきなりか！？

俺と朋花は付き合いだしてから、5ヶ月くらい経ったけど・・・まだしてねーよ！？

もちろんしたくない訳がない、むしろしたい！

・・・けど、なんつーか、こう・・・タイミングが。

そういう雰囲気つて、どう持つてくんた？

俺にはこんなにも難しい事を、こいつはこうもあっさりと・・・頭に刻み込まれて消えない写真の映像に苛つき、それと同時に、腹の中で黒い何かが渦巻くのを感じて、何かすげー嫌な気分だ。おまけに

「先越されちゃったね。」

弾む声でそう朋花に囁かれ、俺は更に追い込まれたような気分になった。

情けない自分に腹が立つ！（前書き）

「朋花×航」の3話目です。
ではごっしょ。

情けない自分に腹が立つ！

「航あのさ、葵姉の進路聞いてる？」

教室移動の合間に、聡太がこう声をかけてきた。

「・・・本人に聞けば？」

あの時から持て余してる暗い感情のままに、そう返事をした。

俺だって、ねーちゃんからそんな話、まったく聞いてねーから知んねーし。

推測で適当な事を言う気もねーし・・・俺なんか聞くより、本人に聞いたほうが確実だろう？

別に、聞いたっておかしくも何ともない関係になった訳だしさ。

・・・ただでさえ今、聡太と話すのきついんだ。

「お前等仲いいんだろう？ 帰りにでも捕まえて聞いてみればいいじゃねーか。でも、そのまま家に上がり込んでいちゃつくなよ？」

別に聡太のせいじゃないけど・・・聡太見ると苛ついてしまう。だからつい、今みたいに余計な事を言ってしまう。

「誰がお前の家でいちゃつくか・・・今日は弟殿の言う通り、昼にでも葵姉を誘うよ。」

トゲのある声で言った聡太は、俺を追い抜いて先に理科室に入ってしまった。

・・・まったく、何やってんだ俺は？

「へー、喧嘩してたんだ。それで聡太くとギクシヤクしてるのか。あんた達も喧嘩するんだね？」

昼休みの教室で、弁当を食った後の朋花の疑問に、弁当に追加してのコロッケパンを食いかけの俺が答えた。

選択教科の違う朋花は、あの時あの場におらず、不自然な俺達二人

の態度に疑問を感じたらしい。

まあそうだろうな・・・

朋花は自分の席で片肘をついて、さも可笑しそうなものを見るように俺を見ている。

「前はしょっちゅうしてたさ、あいつ結構短気だからな。最近はずっと朋花が一緒に、そういう事は減ったけどな。」

かなりの割合で三人一緒にいる事が多い。

そうだ、朋花と二人でいるより、三人でつるんでる時間の方が長い・・・。

「二人ならどうだったんだろうな？・・・もし、もつと二人でいる時間がもつと長かったら・・・聡太に先越されてなかったかな？」
写真を見てから、一人でそんな事ばかり考えて・・・結局、聡太に八つ当たりをしてしまった。少し時間が経った今、実はかなり後悔している。けど多分、今の俺は謝ろうとしても、逆に拗らせかかない。

腹の中のモヤモヤとした気持ちのせいで、あいつの顔を見たらどうせまた余計な事を言ってしまう。

聡太はきつと今頃、屋上でねーちゃんと仲良くやっていたら。俺がそう言ったんだ。

その想像は、俺の複雑な気分をさらに増幅させていた。

「何それ！？まさか喧嘩の理由ってそれ？」

朋花は急に大きな声を上げて、腹を抱えて笑い出した。

それからしばらく笑い続け、その声が止むと厳しい目を向けてきた。

「あーおかしい・・・それで、聡太くんは八つ当たり？やっぱり航はバカだ。」

「分かってる。頭じゃ分かってるんだ！けど・・・なんか、胸の中がスッキリしないんだ。それに、俺等は付き合い出して結構経つけど・・・その、全然何も・・・。」

俺は自分の彼女に何言ってるんだ！？

パニくる気持ちと、どこか冷静な部分との間に挟まれて、それ以上言葉が出てこなくなつた。八つ当たりだって事は分かつてる。羨ましがってどうなる事でもないって分かつてる。だから、言い訳の言葉も途切れた。

そんな俺に朋花は、溜息を吐きながら水筒の蓋を捻つて開けた。そしてその水色の水筒を傾けて、口をつけると中身を流し込み、そして蓋を戻した。

俺は黙つてその様子を見てみると、一度ひどく睨まれて、右手で俺のネクタイを掴まれ引つ張られた。

・・・これは、しつかりしろつて殴られるのか？ いや、利き手じゃねえな。

じゃあ、このままネクタイを締め上げられるのか？

姉から受けた数々の仕打ちが染み込んだ悲しい弟の思考は、そんな事ばかりを考えてしまう。

・・・だが、そんな事態は起きなかった。

「本当に航はバカだな？　そういうのは時間の長さじゃなくて・・・動かないと意味が無いって知ってるか？」

突然反対の手で目を塞がれて、静かな声を聞いた後・・・さらにネクタイを引つ張られた。

訳が分からないまま身を乗り出す形になると、次の瞬間驚く事が起きた。

唇に、温かく柔らかいものが触れた。

すぐ側で息がかかり、麦茶と朋花の匂いがした。

そして・・・少ししてその温もりは離れた。

俺はそのまま呆然として固まり。

「・・・しつかりしろ。」

隠された目の所をそのまま押され、後ろの席をひっくり返しそうになった。

「これでイーブンだろう？ さっさと仲直りしてこい、バカ。」

心なしか赤い顔を逸らし、強い口調で言う朋花はとても可愛いかった。

・・・そして、俺は本当にバカなんだと・・・腹の底から情けないと思った。

立ち聞きして気付いた事(前書き)

「朋花×航」の4話目です。
ではごっご。

立ち聞きして気付いた事

朋花に言われるまま屋上上がった。

反対する理由も無く、反対するほどバカじゃなくて、反対できる立場じゃない。

だが、聡太の指定席の階段の裏に行こうとして、足が止まった。生まれたときから聞いている声が聞こえたからだ・・・そうだよ、一緒にいるんだっただよな。

聡太はねーちゃんと真面目に進路の話をしているらしく、俺が割って入るのは気が引けて、そのまま立ち尽くしてしまった。

「まだ全然なのよね・・・。資料見て考えろって先生にも言われたんだけど、何見たらいいのかも分からないのよね・・・。」

「何もって、理系文系も？」

「それはさすがに文系かな？ 昨日とりあえず出してみたファイルが、かなり遠くの学校でね・・・そっか、そういう事もあるんだなって、改めて思い知らされちゃった。」

「そうだね。僕も・・・ずっと前からそんな心配ばつかしてたよ。・・・ごめんね。」

「何が？」

「葵姉には、きちんと自分の道を進んで欲しい。だから、僕の事を考える必要は無いよ。・・・絶対追いつくから。例えばどこに行っても葵姉は僕のものだ。距離は関係ない。」

聞こえてくる二人の声に、俺はますます自分が情けなくなつた。

・・・やっぱ俺バカだな、自分の事ばつかじゃねーか。

何にも考えてなくて、チャンスが来るのを待ってただけで、時間を無駄にしてきただけの俺が、聡太と比べて羨ましがってどうすんだ？二人は時間に終わられて・・・だから先を急いでる。

全然俺とは違うんだ。

「つか、謝るつもりで来たけど、やっぱり邪魔できねーよな……。俺は苦笑しながらゆっくり後ずさると、向きを変えて再び階段に向かった。

「……そーいや、ねーちゃんがいなくなるなんて、考えた事も無かったな。

いくら恐ろしい相手でも、そうなることやっぱりどこか寂しいと思う。でも、どうせもつと先には、バラバラになるんだよな……。家族っていったって、ずーっと一緒なんて事はないんだ。俺等はそのうち独立して、それぞれ新しい自分の家族を作っていくんだよな……。その時は、あの二人は一緒になんのかな？

そう考えるのは、やっぱりどこか複雑で……。でも、あの二人が別れてしまうのは、もつと嫌だなんて……。勝手な事を考えながら階段を下りて教室に向かった。

「おかえり航、ちゃんと謝ってきた？」

普通通りの反応で聞いてきた朋花に、俺は首を横に振った。

「今は無理だ。さすがの俺でも、いちやついてる邪魔なんかできねーよ。」

「そっか、それじゃ無理だね。」

朋花は苦笑して、今まで聞いていた音楽プレイヤーを止め、耳からイヤホンを外した。

「また後で謝るさ……。で、あのさ、俺本当に反省した。」

「何を？」

「俺は本当に何もしてねーって事。」

頭を掻いて、一度深呼吸をし、隣の席を拝借して座った。

そしてそれから、上で聞こえてしまった話をした。

聡太は、遠くに離れてしまっても・・・それを覚悟の上で向き合っている。

・・・なのに俺は・・・自分が嫌になるほど情けない。

「気付いたんなら、それでいいんじゃない？」

朋花はそう言っただけで笑った。

「今から変えていけばいいだけだよ。」

いつも通りの自信満々な言葉に、俺は少し気が楽になった。

本当、朋花はスゲーや。

「だな・・・。」

そうだ、俺は今から変わる。

朋花の頬に手を伸ばし、腰を浮かせて顔を寄せ・・・キスをした。

離れたんじゃないかって、もちろん今度は俺からだ。

唇に感じる感触は、さつきと同じで温かく、柔らかい。

・・・でも、俺の気持ちは全く違う。

離れた後の朋花は、最初よりもっと赤い顔してた。

「これがその決意の証だ。」

「・・・不意打ち。」

そう言っただけで顔を伏せるから、

「お互い様だろ？」

って言うと、お互い自然と笑い声がこぼれた。

それから、聡太はねーちゃんと登校するから、俺置き去りにされるって話をした。

すると朋花は、「じゃあ、朝早いけど一緒に行く？」って、誘ってくれた。

・・・けど俺は、「無理、早過ぎ。」と断って、笑われた。

そんな時、聡太が戻って来た。

先に気付いた朋花に目で促され、俺は思いっきり謝った。

「聡太っ、俺が悪かった！！・・・俺自分の事ばっかでお前に嫉妬

してた！」

「そうだ嫉妬だ。」

「一体何の話だ？」

変わると決めただから、さっさと謝って仲直りするに決まってるじゃねーか。

「俺、お前がねーちゃんとキスしてる写真見て、先越されて焦ってたんだ！」

俺と聡太を比べたって、何にもなりやしねーのに、何か悔しかった。

「なっ、何大声で言ってるんだお前!？」

「だから、謝ってるんだ。」

聡太に八つ当たりしたり、自分じゃないような行動をした事が恥ずかしくて、申し訳なくて、それをものすごく謝りたい。そして、いつも通りに戻りたい。

「そうじゃなくてだな、頼むから僕まで巻き込むな・・・」

そう弱く言った聡太は、しゃがみ込んで頭を抱えてしまった。

「どうした聡太？ 大丈夫か？ 立ちくらみか？」

「違うっ！」

ふと気付けば、激しく否定する聡太と、俺達を見て笑ってる朋花と・・・。

よく分かんねーけど、いつも通りだなんて・・・何かホツとした。

俺の目標(前書き)

「朋花×航」の5話目です。
ではごっご。

俺の目標

教室の窓際の机に、行儀悪く座って窓からグラウンドを眺める。ちなみにここは、俺の席じゃない。

野球部とサッカー部がネットで隔てられ、そのさらに向こう側の長い細いスペースで、陸上部が練習をしている。

あまりに遠過ぎて、どれが朋花かなんて分かりやしなない距離だ。

朋花に「今日は一緒に帰ろう。」と誘ったものの、部活なんかに入っていない俺はする事も無く、時間を潰す場所なんかも別に無くて、それを見越した朋花が愛用の音楽プレイヤーを貸してくれた。

見た事のないロゴの海外製で、かなり操作に癖があるからと、部活に行く前に使い方をかなりしっかりレクチャーしてくれた。

けど、まあ、イヤホン耳に突っ込んだまま、ランダムに流れる曲を聞き流して、ぼんやりしてるだけだから、そんなに使い方の説明いらなかったけどな。

しかし、見事にロックばかりだな。

そういう雑誌を読んでものは知ってるけど、聞くのもこんなんばっかなんだな。

激しいドラムのリズムと、響き渡るギターのメロディー、音を締め上げるベースの低音、そして見事に男の声ばっかのボーカル。

延々聞いていると、俺に嫉妬させる気でこれ置いてったんじゃないだろうなって、妙な事を考えてる自分がいて・・・思わず、んな訳ねーだろって、自分で突っ込んだ。

「頑張るよなー、朋花。」

「そう?」

「朝練に、帰りもこんなだし。勉強もちゃんとしてんだろ?」

「当たり前じゃん。航が何もしてないだけだつて。」
「……だよな。」

教室でぼんやりしてる時に、それを考えていた。

帰宅部は帰宅部なりに楽しいんだが……聡太ん家に、俺ん家じゃ見れない物持ち込んでの鑑賞会とか時々やってたし。

あいつ最初は嫌がるくせに、結局は見てんだよな。

本当こういう時は、親の帰りが遅い家って便利だよな。

うちは母ちゃんずつといるから、んなもん見る隙なんかありやしねえ。

あいつのどこみために、自分の部屋にテレビなんか無えしさ。

しっかし、それもやり辛くなったな……

二人がようやくまとまって……まさか、こんな所に影響してくるとは思ひもしなかった。

「航、自覚があったんだ。」

「……あるよ。」

まあ自覚したのは、ついさっきだけだな。

「何かやる事ねーかな？」

それまでは頭に花が咲きそうなくらい、何も考えて無かったけど。窓の向こうの芥子粒みたいな一生懸命な朋花を見ると、俺本当に何やってんだろう？……って、本当はどれが朋花か分かんなかったけど、みんな必死に走ったり飛んだりしてたんだと思う。

「やる事って……部活か、バイトくらいじゃない？ そうだ後は勉強して成績上げるとか？」

「……何かやだ。そういうんじゃないやなくてさ、何か熱中できるもんねーかな？」

「熱中ねえ……あ、それじゃあバンドやんない？」

「バンド？」

「今日貸したやつに、いっぱい入ってたでしょ？」

そう話す朋花は、目をキラキラ輝かせ身を乗り出して来て、俺は思わずたじろいだ。

「あ、ああ・・・それしか無かったな。」

「うん、だからバンドやろう。」

「・・・何が『だから』？ 何で断定？」

「えー、だって、バンドマンの彼女ってポジション良くない？」

「・・・そんな理由かよ？」

「で、メジャーになつてくれたら、私は嬉しいよ？ 鼻が高いよ？」

ほらほら彼女喜ばせてみない？」

朋花は、本当に楽しそうな顔してて、実現したら本当に喜んでくれるんだろうなつて、そんな夢みたいな話に、ついこう返事をしてしまった。

「そうだな・・・じゃあ考えてみるか。」

「へ？」

こう言わせた本人は、逆に驚いて動きを止め、大きく目を見開いた。

「けど、俺バンドよく知らねえからさ、教えてくれよ？」

「・・・あ、うんいいけど、本気？」

「朋花が喜んでくれるなら、本気でやるよ？」

モテたいって動機でバンド始めるヤツはいっぱいいるんだ。彼女を喜ばせたいからって動機だって、おかしくないだろう？

戸惑いながら見上げてくる朋花に笑いかけ、また不意打ちでキスをした。

そしてその直後、キキーツという甲高い耳障りな音と、その後には、

「コラーっ、安田！！ 何やってんだお前っ！！」

っっていう覚えのある怒声が、後ろから聞こえた。

俺の目標（後書き）

以前にうっかり航と朋花の未来を、ノリでやってしまったのでそこへ向けての布石です。

ええ、全然違う話で。

パラレル設定でもいいかなーとか、一瞬思いはしたものの、やっぱりそれもなーって。

バカ兄貴と決心（前書き）

「朋花×航」の6話目です。
ではごっしょ。

バカ兄貴と決心

聞き慣れた声に驚いて一歩下がって唇を離し、音と声のした方を見ると・・・やっぱり和樹がいた。

「あー和樹、やっぱりいるんだ。」

「おう朋花お帰り・・・って、そうじゃないだろ？ 何でお前等、

道の真ん中でキ、キスしてんだよ!？」

和樹は、急停車した自転車から降りると、ズカズカとこっちに近付いてきた。

・・・より正しくは、航の方にだ。

「何でって・・・そりゃしたいから。」

航は、本当に別人みたいになった気がする。

今から変えていけばいいって、確かに言ったけど・・・キスして変なスイッチ入っちゃったのかな？

けど、それはそれで、変に堂々としてて・・・ちよつと格好良いかもしれない。

「場所を考えろ！ いや、場所だけの問題じゃないが。」

「別に、誰もいないし。」

「俺がいるだろ。」

「偶然通りかかっただけじゃん。」

「偶然でも何でも、人は通るの!」

ちよつと話の方向がおかしくて、妙な言い合いしてるけど・・・何か面白いからいいや。

どこに落ち着くか、黙って聞いてみてみよう。

「俺は気にしないけどな。」

「少しは気にしろ、恥ずかしい。」

「何で？ 好きな子とキスして何が悪い?」

「悪くは・・・いやいや、うちの妹に手を出すなっての!」

「何で？ 妹は妹じゃねーか。家族だけど彼女じゃない。あんたに

は関係ねーだろ？」

「いや、だけど……。」

「あんたもさ、妹追っかけてばっかいないで、自分の事考えた方がいいんじゃないか？」……それがトドメだったらいい。

和樹は二の句が継げず黙り込み、その隙に航は私の手を引いて歩き出した。

その言葉は、私が「シスコンやる？」と、からかった……その答えのような気がした。

和樹に向かっていう事で、自分に言い聞かせてるみたいなの……ちょっと違うな。

気付いて認めた事を言葉にした？ そんな感じかもしれない。

朋花を家まで送り届けて、走って家に帰った後。

自分の部屋に戻る前に、まずねーちゃんの部屋に寄った。ドアをノックをして返事を待つ。

……これやらねえと、ねーちゃんに酷い目に合わされるからな。

「ねーちゃん……ちょっといいか？」

ドアを少し開けて隙間から顔を覗かせると、ねーちゃんは机で本読んでたらしい。

振り返ったねーちゃんは、意外そうな表情を見せた。

「何？ 航どしたの？ 今帰りつて、遅いじゃない。」

「まあな。」

まだ何もちゃんと言ってなくて、自分のためにも言つとかねーとして、朋花の兄ちゃん見て思った。あれは、下手したら俺の姿かもしれねえなって。

……でも、絶対あはなりたくない。

だから、はじめをつけるためにここにいる。

「あのさ、その……良かったな、聡太とうまくいって。」

「な、何、急に？」

赤くなったねーちゃんがおかしかった。
ねーちゃんがきれいなのは俺だけじゃなく、みんな知ってて、すっげー怖いのも一部の人間はよく知っている・・・特に親しいヤツなら尚更だ。

けど、意識してんのかどうか分かんない頃から、いつの間にか聡太だけは特別扱いになってた。

聡太の方は、分かりやすかったけどな。聞いたらあっさり認めたし。最終的に開き直るんだよ、あいつは。

・・・あれから何年経ったかな？
どっちにしろ、やっつとだ。

「こないだはびっくりしてさあ、ほら、俺・・・まだちゃんと言っ
てなかったからさ・・・そんだけ。」

「航？」

「ま、両思いおめでと。・・・随分かかったけどな。」

そう言い残してドアを閉めた。

よしっ、これで俺は気が済んだ。

・・・後は好きにやってくれ。

突然ドアが開いた。

いつもいつも勝手に入ってきて・・・ノックぐらいしなよ。

・・・と、言う間もなく、ズカズカと勢い荒く入ってきた和樹は、
表に字の書かれた白い紙を私の前に置いた。

「朋花、これ安田に渡せ。」

見上げると鼻息が荒く、目の力が強い。おまけに薄っすら笑ってて・・・なるほど、この顔は勢いで悪乗りしてるな。

「和樹・・・芸が細かいね。これ筆ペンで？」

「ああ、やる気満々な感じがするだろ？」

白い紙・・・コピー用紙の四方を折り畳んで、たぶん別の紙を包んでいる。

表には、荒々しさを表すようにか、勢いよく大きな字で『果たし状』と書かれている。

「所で何する気？」

「果たし状っていや、決闘だろ？ 言われっ放しで黙ってられるか。」

「そっか、口で勝つ気無いんだ……。」

完全に和樹の負けだと思うけど、認めるのが嫌なんだな。

「……わが兄貴ながら面倒なヤツだ。」

「航の反応が面白そうだから、渡すのは構わないけどさ……私は和樹の見方なんか絶対にしないからね？」

顔に浮かぶ笑みが消え、怯んだ和樹にさらに言葉を続けた。

「和樹があれでもまだ諦めない気なら、私は意地でもそのシスコン止めさせてやるから。」

航の存在を知ってから、エスカレーターする一方の和樹の過保護振りに、かなり迷惑してたんだ。

何故か料理の道に進むと言いだして、大学受験をしなかった和樹は、調理の専門学校通い始め……更に鬱陶しくなった。

時間に余裕ができたせいかな朝は送るって言うし、断ると距離を取っても付いて来てる。

バイトの無い日はいつもあの辺りで待っていて、今日の帰りに会ったのだって偶然じゃない。

「いい加減止めてよ。」って、いくら言っても聞かず。「お兄ちゃん心配なんだ」の一点張りで、本当に鬱陶しくて仕方が無い。

それに、私に張り付いて無駄に時間を浪費してるのが、余計に腹が立つ。

本当、航も言ってたけど、もっと自分の事にやればいいのに。

……そっか自分の事だ。

いい事を思いついた私は「用が済んだなら出て行け」って和樹を部屋から蹴り出した。

謝ったって許してやらない。

果たし状なんて物まで用意して、航と決闘しようなんてふざけた事考えてくれたんだから・・・こっちだって、それ相応の対応をさせてもらおうよ？

過剰なシスコン改めさせて、自分の事で手一杯にさせてやる。

そして私は隣の部屋の様子を探り、和樹がお風呂に向かうタイミングを待って部屋に忍び込んだ。

正義は勝つ！（前書き）

「朋花×航」の7話目です。
ではごっご。

正義は勝つ！

翌朝、一人で教室に入って来た航を捕まえて昨日の紙を渡した。

「・・・何で果たし状？」

「兄貴から航に渡してくれって、渡されたんだけど・・・一緒に成敗しよう。」

「はぁ？」

何がどうして果たし状になるのか、まったく理解してないながらも、とりあえず紙を開いていた航は、私の言葉に思わず手を止めた。

「昨日航に言われた事が納得できないみたいだから、納得させよう。そしてシスコンを改めさせよう。」

「・・・はぁ、そういう事か。」

再び手を動かして中の紙を開くと、表同様に筆ペンで、勢い良く殴り書きされていた。

果たし状

安田殿

土曜午後六時半 河川敷にて決闘を申し込む

うちの妹に手を出した罪は重い

覚悟して待っている

石川和樹

「・・・確かに、堂々としたシスコン宣言だな。」
読み終えて、声を殺して笑う航に、
「という事だから、いい加減正しい道に戻してやろう。」
それから私は、大バカな兄貴をやり込める計画を航に語った。

待ち合わせは6時半に河川敷。

この時間の設定は、和樹のバイトが終わった後だ。
正確には広い河川敷のどこなのかって、本当は突っ込みたい所だけ
ど、階段のある所を航と二人で下りて、和樹が来るのを待った。
昼に色と々動いたから、こっちの準備は万端だ。

日が傾いて冷え込んできた河原で、時間つぶしに石を川に向かって
投げて遊んでいると、甲高いブレーキ音が響いた。振り仰ぐと和樹
が土手の上で自転車を止めていた。そして、きちんとワイヤーの鍵
をかけてから一気に階段を駆け下りてきた。

携帯で確認した時間は6時32分。2分の遅刻だ。

「おう悪い、待たせたか？」

そのフレンドリーさは決闘らしからぬ雰囲気で・・・まあ素の兄貴
だからどうしようもないけど。

「・・・和樹、決闘って感じじゃないじゃん。」

「そっか？・・・まあノリだし。実際に喧嘩しようって気はない
んだ。」

と、目を背けた。私の敵対発言に、引っ込みが付かなくなったとい
う所だろうか？

「じゃあ何で果たし状？」

今まで側々に座り込んでた航が立ち上がりながら聞くと、一転して
険悪な様子で牙を剥いた。

「ノリだったの、今言っただろ!？」

私と航でここまで態度を変えろとは・・・我が兄ながら情けない。あまりにも器が小さ過ぎる。

「・・・別に何でもいいけどさ、じゃあ結局何やんの？ 話でもするんのか？」

間違いないと和樹に呆れてる航は、頭を掻きながら私の隣に並び、和樹もそれにすぐさま反応を見せた。

「妹に寄るな、近過ぎだ。」

「本当に呆れるほどシスコンだな・・・。朋花、とつとつやっちまおう、見てると情けなくて腹が立つ。」

「あ、あぁうん。」

珍しく気が立つてる航に驚きながら、そう答えてカバンを探り、一枚の写真を引っ張り出した。

「何話してんだ、離れろって言うてんだろ？」

その言葉に、私も苛つとした。

「あのさ、和樹、いい加減にしてくんない？ 私かなり迷惑してんの、分かる？」

「・・・何が？」

まったく分かってない、意地でも分かるうとしない兄貴に、いい加減腹を立てて、写真を目の前に突き出して先を続けた。

「竜太くんを確認したんだけど、和樹は白根ゆかりって人が好きなんだって？ で、同じ学校に通ってるんだってね、いきなり料理人になるって言い出して驚いたけど、そっか、そんな理由だったんだね？」

テンション低く、トーンも低く、人間あまりに腹が立つと大きな声は出ないんだなど、私は身をもって知った。

昼に和樹の友達の竜太くんに会って、詳しい話を聞いて、この写真を借りた。ちっちゃくて可愛い感じの、守ってあげたくなるようなタイプの人だ。

写真を奪い取って、うるたえる和樹を余所に、私は言いたい事をおこの際だとばかりに吐き出した。

・・・本当は、いつも言ってる気がするけど、これはまだ言った事が無い。

「妹の事より自分の事に集中しなよ。ましてや好きな子いるんなら、本当そつちに必死になつてよね。」

返す言葉の無い和樹の様子に、

「そこまで言つてやんなくても・・・。」

と、何故か航がフオーに回つた。

そんな仏心出さなくても、一度これでもかかってほどやっちゃえば改めると思うのに。そう思いながら聞いていると、最終的には結構キツイ内容だった。

「最近うちのねーちゃんにも彼氏ができてさ、その気持ち、俺にも分かんない訳じゃないんだよな。けど・・・だからこそ、今のあんたはみつともないと思う。」

苦笑しながらそう話し始めたそれは、自分の事で。

「ねーちゃんはねーちゃん、ちゃんと選んだ筈なんだ。俺がどうこう言う問題じゃねえ。むしろ、やっとくつついたって感じなんだけどさ。もし問題があれば、そんな時考えればしいしさ、だから、朋花の事は俺に任せてくんない?」

「偉そうに・・・。」

和樹はそう言つたきり、それ以上言葉は続かなかった。

さすがのバカ兄貴でも、反論はできなかつた。誰も自ら負けを認めるようなマネはしたくないだろう。

・・・やるな航。

だから私が言葉を継いだ。

「・・・取り合えず、今日は終わりにしよ。私お腹空いちやつた。一つしかない答えに気付いていても、たぶん和樹は、まだ素直にはなれないから。」

追い詰められて、内心で葛藤し・・・まだしばらく声には出せないだろう。

そう、誰かが幕を引かないと、この場は収まらないから。

私は私、和樹は和樹！（前書き）

「朋花×航」の最終話です。
ではごきげん。

私は私、和樹は和樹！

「朋花、今日は兄ちゃんと帰れ。」

「って、どこか優しくそうな眼差しで言った航は、先に走って帰ってしまった。」

「・・・さすが実は気遣いの人。」

仕方が無いので、何となく抜け殻になってしまったような和樹を引き摺って、私達も帰途に着いた。

ぼんやりしてる和樹は、家に帰ってからも相変わらずそのまま、食卓で不自然に押し黙っている様子に、両親が心配してたけど、

「別に、何でもない。」

って誤魔化すから、余計に心配されていた。

そんな重苦しい中での夕飯を終え、お風呂にも入って、そろそろ寝ようかかって頃になって、部屋のドアがノックされた。

「いいか？」

「って、力無く笑う今の和樹の姿は、確かに親に心配されるようになって思った。」

ただでさえ私の件があった後だから、多少神経質になってるけど、それを引いてもやっぱり心配されるだろう。

「・・・うんいいよ、入って。」

部屋に入った和樹は、そっとドアを閉めて床に座った。

私はベッドの真ん中から、端の方に移動し足を垂らす格好で座り直した。

「朋花・・・そんなに迷惑なのか？」

「思い詰めたような様子で、そう搾り出した和樹を見ると、私は何となく腹が立った。」

「うん、思いつきり。」

だから、容赦の無い言葉をぶつけた。

「後をつけられるのも、航の事に干渉してくるのも、こんな情けない姿を見せられるのも、本当に迷惑だ。」

「だけど兄ちゃんはだな、やっぱりお前が心配でさ……。」

「心配するところ、思いつきりズレてる。確かに私は心配かけたけどさ……航の事は心配してくれなくていい。」

「けど、お前振り回されて泣いてたろ？ あいつだって都合の悪い事黙ってたし……。」

「……確かにそんな事もあったけど、そんなのもう解決済みの事だ。今更そんな事を蒸し返さなくていい。」

「それは、私が聞かずに逃げちゃったから……航も話す順番悪いけどさ、でももうそういうヤツだって分かったからさ、大丈夫。」

「……だから、私の見る目を信用してよ。航のお姉さんみたいに、私だってちゃんと選んだつもりだよ？」

和樹に心配されるような相手じゃないって事くらいは、自信持って言える。

「でも、もし見る目が狂ってたんだったら、振って別れちゃえば良いだけだしさ。」

私の冗談半分の言葉に、和樹は笑うのを堪えた。

「……ドライだなお前。」

「そう？、常識でしょ……って事で、安心して自分の方に集中しなつて、私のせいで和樹の時間を浪費させてるなんて、冗談じゃないからね。私は私、和樹は和樹だ。」

きっぱりと言い切ると、和樹にも納得できる部分があったらしく、

「……かもな。」

と、同意した。

「……って話を帰ってからしたよ。」

翌日、雑誌をたくさん持って、航の部屋に押しかけた。

「教えてくれよ」と言ってくれたから、さっそくバンドについてのレクチャーをするためにだ。

カラーページの多い雑誌を、カバンに入るだけ詰めて肩に担ぎ……たぶん今肩は赤くなってるはずだ。少しヒリヒリするもん。それでも、うきうきしながらここに来た。

私のバンド好きは、やりたいというのでは無く、あくまでも視聴者としてだ。

見て、聞いて、彼らの思いに触れたい。詞も音も彼らの魂の叫びだ。時に奇抜なグループも、面白くていい。

それをすぐ側で見られるのなら……そう考えると、重いぐらい何でもない。

……でも、まずは昨夜の話。

当事者には、きちんと最後まで伝えなければならない。

「朋花……振らないでくれよ？」

話し終わった頃には航の顔は、引き攣っていた。

雑誌の1冊を手にしたまま、それを読む事無く、私の話をちゃんと聞いていた。

「それは航次第だな。私を大事にしてくれて、飽きさせないでいてくれれば振らないよ。」

「……頑張ります。」

航は苦笑しながらそう言って、溜息をついた。

「うん、じゃあ頑張って、まずはバンド立ち上げよう。」

メンバー募集に、楽器の調達が第一で、そうしたらどんな曲何やるか、それをどこで練習するか、ワクワクする事がいっぱいだ。

だから航、私をちゃんとバンドマンの彼女にしてね。

私は私、和樹は和樹！（後書き）

如何だったでしょうか？

感想なり、評価なり頂けると。嬉しく思います。

とりあえず発熱の今、これ以上起きてるのは無理です。

（2010・05・24）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3382t/>

そう遠くない未来。

2011年6月11日10時58分発行